

かもめ

ЧАЙКА

——喜劇 四幕——

青空文庫

人物

アルカージナ（イリーナ・ニコラーエヴナ）　とつぎ先の姓はト
レープレヴァ、女優

トレープレフ（コンスタンチン・ガヴリーロヴィチ）　その息子、

青年

ソーリン（ピョートル・ニコラーエヴィチ）　アルカージナの兄
ニーナ（ミハイロヴナ・ザレーチナヤ）　若い処女、裕福な地主
の娘

シヤムラーエフ（イリヤー・アフアナシーエヴィチ）　退職中ちゆう
尉い、ソーリン家の支配人

ポリリーナ（アンドレーエヴナ）　その妻

マーシヤ　その娘

トリゴーリン（ボリース・アレクセーエヴィチ）　文士

ドールン（エヴゲーニイ・セルゲーエヴィチ）　医師

メドヴェージェンコ（セミヨーン・セミヨールノヴィチ）　教員

ヤーコフ　下男

料理人

小間使

ソーリン家の田舎屋敷でのこと。——三幕と四幕のあいだに二年間が経過

第一幕

ソーリン家の領地内の廢園の一部。広い並木道が、觀客席から庭の奥のほうへ走つて、湖に通じているのだが、家庭劇のため急設された仮舞台にふさがれて、湖はまったく見えない。仮舞台の左右に灌かんぼく木の茂み。椅子いすが数脚、小テールブルが一つ。

日がいま沈んだばかり。幕のおりている仮舞台の上には、ヤーコフほか下男たちがいて、咳せきばらいや槌つち音が聞える。

散歩がえりのマーシャとメドヴェージェンコ、左手から登場。

メドヴェージェンコ　あなたは、いつ見ても黒い服ですね。どう
いうわけです？

マーシャ　わが人生の喪服なの。あたし、不仕合せな女ですもの。
メドヴェージェンコ　なぜです？　（考えこんで）わからんです

なあ。……あなたは健康だし、お父さんにしたって金持じやないまでも、暮しに不自由はないし。僕なんか、あなたに比べたら、ずっと生活は辛つらいですよ。月に二十三ルーブリしか貰もらってないのに、そのなかから、退職積立金を天引きされるんですか

らね。それだって僕は、喪服なんか着ませんぜ。（ふたり腰を

おろす）

マーシャ お金のことじゃないの。貧乏人だって、仕合せにはなれるわ。

メドヴェージェンコ そりや、理論ではね。だが実際となると、そうは行かない。僕に、おふくろ、妹がふたり、それに小さい弟——それで月給がただの二十三ルーブリ。まさか食わず飲まずでもいられない。お茶も砂糖もいりますね。タバコもいる。そこでキリキリ舞いになる。

マーシャ （仮舞台のほうを振り向いて）もうじき幕があくのね。メドヴェージェンコ そう。出演はニーナ嬢で、脚本はトレープ

レフ君の書きおろし。ふたりは恋仲なんだから、今日はふたりの魂が融合して、同じ一つの芸術的イメージを、ひたすら表現しようという寸法でさ。ところが僕とあなたの魂には、共通の接点がない。僕はあなたを想おもっています。恋しさに家うちにじっとしていられず、毎日一里半の道を、てくてくやって来ては、また一里半帰っていく。その反対給付といえは、あなたのそっけない顔つきだけです。それも無理はない。僕には財産もなし、家族は大ぜいときてますからね。食うや食わずの男と、誰が好きこのんで結婚なんかするものか？

マーシャ つまらないことを。(かぎタバコをかぐ) お気持はありがたいと思うけれど、それにお応こたえできないの。それだけの

ことよ。(タバコ入れを差出して) いかが？

メドヴェージェンコ 欲しくありません。(間)

マーシャ 蒸し蒸しすること。おそ晩おそくなつて、ごろごろザーツとき

そうね。あなたはしよつちゆう、理屈をこねるか、お金の話か、
そのどつちかなのね。あなたに言わせると、貧乏ほど不仕合せ
なものはないみたいだけれど、あたしなんか、ボロを着てこじき乞食
ぐらしをしたほうが、どんなに気楽だか知れやしないわ。……

あなたには、わかつてもらえそうもないけど……

右手から、ソーリンとトレープレフ登場。

ソーリン　（ステツキにもたれながら）わたしはどうも、田舎が
苦手な、この分じやてつきり、一生この土地には馴染めまい
よ。ゆうべは十時に床へはいつて、けさ九時に目がさめたが、
あんまり寝すぎたもんで、脳みそが頭蓋骨ずがいこつに、べったりくつ
ついたような気がした——とまあいった次第でな（笑う）。と
ころが昼めしのあとで、ついまた寝こんじまつて、今じや全身
へとへと、夢にうなされてるみたいな気持さ、早い話がね……
トレープレフ　そりやもちろん、伯父さんは都会に住む人ですよ。
（マーシャとメドヴェージェンコを見て）皆さん、始まる時に
は呼びますよ。今ここにいられちや困るな。暫時ざんじご退場を願
います。

ソーリン (マーシヤに) ちよいとマーシヤさん、あの犬の鎖を解いてやるように、ひとつパパにお願いしてみてくださいませんか。やけに吠^ほえるでなあ。おかげで妹は、夜っぴてまた寝られなかった。

マーシヤ ご自分で父におっしゃってくださいまし、あたしはご免こうむります。あしからず。(メドヴェージェンコに) さ、行きましょう!

メドヴェージェンコ (トレープレフに) じゃ、始まる前に、知らせによこしてください。

ふたり退場。

ソーリン　すると、夜どおしました、吠えられるのか。さあ、事だぞ。わたしは田舎へ来て、思う通りの暮しのできた例ためがない。前にやよく、二十八日の休暇を取っちゃ、ここへやって来たもんだ。骨休めや何やら——とまあいった次第でな。ところが、くだらんことに責め立てられて、着いたその日から、逃げ出したくなつたよ（笑う）。引揚げる時にや、やれやれと思つたもんだ。……だが今じゃ、役を退ひいてしまつて、ほかに居場所がない——早い話がね。いやでも、ここに釘くぎづけだ……

ヤーコフ　（トレープレフに）若旦那わかだんな、「わっしら」ちよいと

一浴びしてきます。

トレープレフ いいとも。だが十分したら、みんな持ち場にくれよ。(時計を見て) もうじき始まりだからな。

ヤーコフ 承知しやした。(退場)

トレープレフ (仮舞台を見やりながら) さあ、これが僕の劇場だ。カーテン、袖がそで一つ、袖がもう一つ——その先は、がらんどうだ。書割りなんか、一つもない。いきなりパツと、湖と地平線の眺めが開けるんだ。幕あきは、きっかり八時半。ちょうど月の出を目がけてやる。

ソーリン 結構だな。

トレープレフ 万二ーナさんが遅刻しようもんなら、舞台効果は吹っ飛ばす。もうくる時分だがなあ。あのひとは、お父

さんやまま母の見張りがきびしいもんで、家を抜け出すのは、
牢破りも同様、むずかしいんですよ。（伯父のネクタイを直し
てやる）伯父さんは、頭も髯ももじやもじやだなあ。ひとつ、
刈らせるんですね。……

ソーリン（髯をしごきながら）これで一生、たたられたよ。わ
たしは若い時分から、飲んだくれそつくりの風采——とまあ
いった次第でな。ついぞ女にもてた例しがない。（腰かけなが
ら）妹のやつ、なぜああ、おかんむりなんだろう？

トレープレフなぜかって？ 淋しいんですよ。（ならんで腰を
おろしながら）妬けるんです。おつ母さんはてんからもう、こ
の僕にも、今日の芝居にも、僕の脚本にも、反感を持つてるん

だ。というのも、演やるのが自分じゃなくて、あのニーナさんだからなんです。僕の脚本も見ない先から、眼かたきの敵かたきにしてるんだ。ソーリン（笑う）まさか、そう気を回さんでも……

トレープレフ おつ母さんはね、この小っぽけな舞台上で喝かつさい采さいを浴びるのが、あのニーナさんで、自分じゃないのが、癩しやくのたねなんですよ。（時計を見て）ちよいと心理的な変り種でね——

おつ母さんは。そりや才能もある、頭もいい、小説本を読みながら、めそめそ泣くのも得意だし、ネクラースフの詩だって、即座に残らず暗あんしやう誦じゆできるし、病人の世話をさせたら——エ
ンジェルもはだしですよ。ところが、例しにあの人の前で、エ
レオノラ・ドゥーゼでも褒ほめてごらんない。事ですぜ！ 褒

めるなら、あのひとのことだけでなくてはならん。劇評も、あの人のことだけ書けばいい。『椿姫』^{つばきひめ}だの『人生の毒気』
(訳注 ロシア十九世紀の傾向的作家マルケーヴィチの戯曲)
だのをやる時のあの人の名演技を、わいわい騒ぎ立てたり、感
激したりしなくてはならん。ところが、この田舎にや、そうい
う麻酔剤がない。そこで、淋しいもんだから苛々^{いらいら}する。われ
われがみんな悪者で、親のカタキだということになる。おまけ
に、あの人は御幣^{ごへい}かつぎで、三本蠟燭^{ろうそく}(訳注 死人のほとり
を照らす習慣)をこわがる、十三日と聞くと顔いろを変える。
しかも、けちんぼときている。オデッサの銀行に、七万も預け
てあることは——僕ちやんと知ってるんだ。だのに、ちよいと

貸してとでも言おうもんなら、めそめそ泣きだす始末だ。

ソーリン お前さんは、自分の脚本がおつ母さんの気に入らんものと、頭から決めこんで、しきりにむしやくしや——とまあいつた次第だがな。案じることはないさ——おつ母さんは、君を崇拜しているよ。

トレープレフ (小さな花の弁をむしりながら) 好き——嫌い、^{きらい}

好き——嫌い、好き——嫌い。(笑う) そうらね、おつ母さんは僕が嫌いだ。あたり前さ！ あの人は生きたい、恋がしたい、派手な着物が着たい。ところがこの僕が、もう二十五にもなるもんだから、おつ母さんは厭^{いや}でも、自分の年を思い出さざるを得ない。僕がいなけりや、あの人は三十二でいられるが、僕が

いると、とたんに四十三になっちゃう。だから僕が苦手なんですよ。それにあの人は、僕が劇場否定論者だということも知っている。あの人は劇場が大好きで、あつぱれ自分が、人類だの神聖な芸術だのに、奉仕しているつもりなんだ。ところが僕に言わせると、当世の劇場というやつは、型にはまった因襲にすぎない。こう幕があがると、晩がたの照明に照らされた三方壁の部屋のなかで、神聖な芸術の申し子みたいな名優たちが、人間の食ったり飲んだり、惚ほれたり歩いたり、背広を着たりする有様を、演じてみせる。ところで見物は、そんな俗悪な場面やセリフから、なんとかしてモラルをつかみ出そうと血まなこだ。モラルと言っても、ちっぽけな、手つとり早い、ご家庭にあつ

て調法——といった代物しろものばかりさ。そいつが手を変え品を変えて、百ぺん千べん、いつ見ても種は一つことの繰返しだ。そいつを見ると僕は、モーパッサンみたいに、ワツと逃げ出すんです。エツフェル塔の俗悪さがやりきれなくなつて、命からがら逃げ出したモーパッサン（訳注 その小説『さすらい』参照）みたいだね。

ソーリン 劇場がないじゃ、話になるまい。

トレープレフ だから、新しい形式が必要なんですよ。新形式があるんで、もしそれが無いんなら、いつそ何にもないほうがいい。（時計を見る）僕は、おつ母さんが好きです、とても好きです。だが、あの人の生活は、なんぼなんでも酷ひどすぎる。しよ

つちゆう、あの小説家のやつとべたべたしちや、のべつ新聞に浮名をながしている。これにやまつたく閉口ですよ。時によると、人間の悲しさで、僕だつて人なみのエゴイズムが、むらむらつと起きることもある。つまり、うちのおつ母さんが有名な女優なのが、くやしくなるんです。もし普通の女でいてくれたら、僕もちつとは幸福だつたらうにな、つてね。ね伯父さん、これほど情けない、ばかげた境遇があるもんでしようか。おつ母さんの客間には、よく天下のお歴々がずらり顔をならべたもんです——役者とか、文士とかね。そのなかで僕一人だけが、名も何もない雑魚ざこなんだ。同席を許してもらえるのも、僕があの人の息子むすこだからというだけのことにお過ぎん。僕は一体誰だ？

どこの何者だ？　大学を三年で飛び出した。理由は、新聞や雑誌の社告によくある、例の「さる外部事情のため」（訳注）当時の雑誌などが、思想の弾圧のため発禁になった時に使う慣用句）って奴やつでさ。しかも、これっぱかりの才能もなし、一文だって金はなし、おまけに旅券にや——キーエフの町人と書いてある。なるほどうちの親父おやじは、有名な役者じゃあつたが、元をただせばキーエフの町人に違いない。といったわけで、おつ母さんの客間で、天下の名優や大作家れんが、仁慈まなこの眼を僕にそそいでくれるごとに、僕はまるで、相手の視線でこつちの小つぽけさ加減を、計られてるみたいな気がした、——向うの氣勢を推量して、肩身の狭い思いをしたもんですよ……

ソーリン 事のついでに、ちよつと聞かしてもらうが、あの小説家は全体何者かね？ どうも得体の知れん男だ。むつつり黙りこんでてな。

トレープレフ あれは、頭のいい、さばさばした、それにちよいとその、メランコリックな男ですよ。なかなかりっぱな人物でさ。まだ四十には間まがあるのに、その名は天下にとどろいて、何から何まで結構ずくめのご身分だ。……書くものはどうかと
言う……さあ、なんと云つたらいいかなあ？ 人好きのする
才筆じゃあるけれど……が、しかし……トルストイやゾラが出たあと、トリゴーリンを読む氣にやどうもね。

ソーリン ところでわたしは、文士というものが好きでな。むか

しはこれでも、あこがれの的が二つあった。女房をもらうことと、文士になることなんだが、どっちも結局だめだったな。そう。小つちやな文士だつても、なれりや面白かろうて、早い話がな。

トレープレフ（耳をすます）足音が聞える。……（伯父を抱いて）僕は、あの人なしじや生きられない。……あの足音までがすばらしい。……僕は、めちやめちやに幸福だ！（足早に、ニーナを迎えに行く。彼女登場）さあ、可愛^{かわい}い魔女が来た、僕の夢が……

ニーナ（興奮のていで）あたし、遅れなかつたわね。……ね、遅れやしないでしょう。……

トレープレフ　（女の両手にキスしながら）ええ、大丈夫、大丈夫……

ニーナ　一日じゆう心配だった、どきどきするくらい！　父が出してはくれまいと、気が気じゃなかったわ。……でも父は、今しがた継母ははといっしよに出かけたの。空が赤くって、月がもう出そうでしょう。で、あたし、一生けんめい馬を追い立てて来たの。（笑う）でも、嬉しいわ。（ソーリンの手を握りしめる）

ソーリン　（笑って）どうやらお目めを、泣きはらしてござる。……ほらほら！　悪い子だ！

ニーナ　ううん、ちよつと。……だって、ほら、こんなに息がはずんでるんですもの。三十分したら、あたし帰るわ、大急ぎな

の。後生だから引きとめないでね。ここへ来たこと、父には内緒なの。

トレープレフ　ほんとに、もう始める時刻だ。みんなを呼んでこなくちや。

ソーリン　では、わたしがちよつくら、とまあいった次第でな。

はいはい、ただ今。（右手へ行きながら歌う）「フランスをさして帰る、兵士のふたりづれ」（訳注　ハイネの『ふたりの擲

弾兵』より）……（振返つて）いつぞや、まあこういういった具合に歌いだしたらな、ある検事補のやつめが、こう言いおつた――

――「いや閣下、なかなか大した喉のどですな」……そこで先生、ちよいと考えて、こう付け足したよ――「しかし……厭いやなお声で」

(笑って退場)

ニーナ 父も継母^{はは}も、あたしがここへくるのは反対なの。ここは、ボヘミアンの巣窟^{そうくつ}だって……あたしが女優にでもなりやしまいかと、心配なのね。でもあたしは、ここの湖に惹き^ひつけられるの、かもめみたいだね。……胸のなかは、あなたのことですばい。(あたりを見回す)

トレープレフ 僕たちきりですよ。

ニーナ 誰かいるみたいだわ……

トレープレフ いやしない。(接吻^{せつぶん})

ニーナ これ、なんの木？

トレープレフ にれの木。

ニーナ どうして、あんなに黒いのかしら？

トレープレフ もう晩だから、物がみんな黒く見えるのです。そ

う急いで帰らないでください、後生だから。

ニーナ だめよ。

トレープレフ じゃ、僕のほうから行ったらどう、ニーナ？ 僕

は夜どおし庭に立って、あなたの部屋の窓を見てるんだ。

ニーナ だめ、番人にみつかるわ。それにトレゾール《うちのい

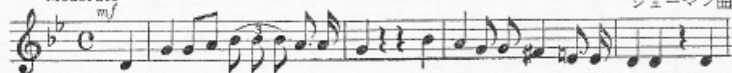
ぬ》は、まだお馴染なじみじやないから、きつと吠えてよ。

トレープレフ 僕は君が好きだ。

ニーナ シーツ。

Moderato
mf

シューマン曲



ふらんすをさしてかえ る へいしのふ たりづれ …

トレープレフ (足音を耳にして) 誰だ? ヤーコフ、お前か?
ヤーコフ (仮舞台のかげで) へえ、さようで。

トレープレフ みんな持ち場についてくれ。時刻だ。月は出たかい?
い?

ヤーコフ へえ、さようで。

トレープレフ アルコールの用意はいいね? 硫黄いおうもあるね?

紅い目玉が出たら、硫黄の臭いにおをさせるんだ。(ニーナに) さ、いらっしやい、支度はすっかりできています。……興奮あがつてますね?……

ニーナ ええ、とても。あなたのママは——平気ですわ、こわくなんかない。でも、トリゴーリンが来てるでしょう。……あの

人の前で芝居をするのは、あたしこわいの、恥ずかしいの。：
：有名な作家ですもの。……若いかな？

トレープレフ ええ。

ニーナ あの人の小説、すばらしいわ！

トレープレフ （冷やかに）知らないな、読んでないから。

ニーナ あなたの戯曲、なんだか演^やりにくいわ。生きた人間がいないんだもの。

トレープレフ 生きた人間か！ 人生を描くには、あるがままで
もいけない、かくあるべき姿でもいけない。自由な空想にあら
われる形でなくちゃ。

ニーナ あなたの戯曲は、動きが少なくて、読むだけなんですも

の。戯曲というものは、やっぱり恋愛がなくちゃいけないと、あたしは思うわ……（ふたり、仮舞台のかけへ去る）

ポリーナとドールン登場。

ポリーナ　しめつぽくなってきたわ。引返して、オーバーシユーズをはいてらしたら？

ドールン　僕は暑いんです。

ポリーナ　それが、医者の不養生よ。頑固がんこというものよ。職掌がら、しめつぽい空気をご自分に毒なことぐらい、百も承知でいらつしやるくせに、まだ私をやきもきさせたいのねえ。ゆうべ

だって、わざと一晩じゆう、テラスに出てらしたり……

ドールン（口ずさむ）「言うなかれ、君、青春を失いしと」

（訳注 ネクラーフの詩の一節）

ポリーナ あなたは、アルカージナさんと話に身が入りすぎて……
：つい寒いのも忘れてらしたのね。白状なさい、あのひと、お
好きなのね……

ドールン 僕は五十五ですよ。

ポリーナ そんなこと——男の場合、年寄りのうちに、はいらな
いわ。まだそのとおりの男前なんだから、結構おんなに持てま
すわ。

ドールン そこで、どうしろとおっしゃる？

ポリーナ 相手が女優さんだと、いつだって平蜘蛛ぐもみたい。いつだってね！

ドールン (口ずさむ) 「われふたたび、おんみの前に、恍惚こうこうとして立つ」(訳注 ネクラーツフの詩の一節) ……よしんば世間が、役者をひいきにして、商人なんかと別扱いにするとしても、まあ理の当然ですな。それが——理想主義というもので。ポリーナ 女のひとが、いつもあなたに惚れこんで、首っ玉にぶらさがってきた。これもその、理想主義ですの？

ドールン (肩をすくめて) へえね？ 婦人がたは、結構僕を尊重してくれましたよ。それも主として、腕のいい医者としてでしたな。十年、十五年まえには、ご承知のとおりこの僕も、郡

内でたった一人の、産科医らしい産科医でしたからね。それに僕は、実直な男だったし。

ポリーナ（男の手をとらえる）ねえ、あなた！
ドールン シツ、ひとが来ます。

アルカージナがソーリンと腕を組んで、つづいてトリゴ
リン、シヤムラーエフ、メドヴェージェンコ、マーシヤが
登場。

シヤムラーエフ 「一八」七三年のポルタヴァの定期市ちで、あの女優はすばらしい芸を見せましたっけ。ただ驚嘆の一語に尽き

ます！ 名人芸でしたな！ それから、これも次手ついでに伺いたいですが、喜劇役者のチャージン——あのパーヴェル・セミヨーンイチですが、あれは今どこにいますかな？ ラスプリューエフ（訳注 スホーヴォ・コブイリンの喜劇『クレチンスキイの結婚』中の人物）を演やらせたなら天下無類でね、サドーフスキイ（訳注 モスクワ小劇場の名優、一八七二年死）より上でしたな。いやまったくですよ、奥さん。あわれ彼、今いづくにか在る？

アルカージナ あなたはいつも、大昔の人のことばかりお訊ききになるのね。わたしが知るもんですか！（腰をおろす）

シヤムラーエフ（ふーっとため息をして）パーシカ・チャージ

ン！ 今じゃあんな役者はいない。舞台の下落ですな、アルカ
ージナさん！ 昔は亭々ていていたる大木ぞろいだつたものだが、今
はもう切株ばかりだね。

ドールン いかにも、光輝さんぜんたる名優は少なくなった。だ
がその代り、中どころの役者は、ずっとよくなったです。

シヤムラーエフ お説には賛成しかねますな。もつとも、これは
趣味の問題で。 *De gustibus aut bene, aut nihil* ですて。 (訳注
みるひとの(こころ)ころに)

この引用句は、ラテンのことわざを二つ、つきまぜたおかしみ
がある)

トレープレフ、仮舞台のかけから登場。

アルカージナ (息子に) ねえ、うちの坊っちゃん、一体いつ幕があくの？

トレープレフ もうすぐです。ざんじご猶予。ゆうよ

アルカージナ (『ハムレット』のセリフで) おお、ハムレット、

もう何も言うてたもるな！ そなたの語で初めて見たこの魂の

むさくろしき。何ぼうしても落ちぬ程に、黒々と沁込んだ心の

穢れ！けが (訳注 第三幕第四場逍遙の訳による)

トレープレフ (『ハムレット』のセリフで) いや、膏ぎった汗

臭い臥床に寝びたり、豕同然の彼奴と睦言…… (訳注 おな

じく。ただしこのくだり、チエーホフはかなり上品に言い直さ

れたロシア訳を踏襲している。いま訳者は、シエイクスピアの原意に近い逍遙訳を採った)

仮舞台のかげで角笛の音。

トレープレフ さあ皆さん、始まります。静粛にねがいます。

(間) では、まず私から。(細身の杖つえを突き鳴らし、大声で)

おお、なんじら、年ふりしゆいしよ由緒ある影たちよ。夜ともなれば、

この湖の上をさまよう影たちよ。わたしたちを寝入らせてくれ。

そして、二十万のちの有様を、夢に見させてくれ!

ソーリン 二十万年したら、なんにもないさ。

トレープレフ だから、そのないところを見させるんですよ。
アルカージナ どうともご随意に。わたしたちは寝るから。

幕があがって、湖の景がひらける。月は地平線をはなれ、
水に反映している。大きな岩の上に、全身白衣のニーナが
坐^{すわ}っている。

ニーナ 人も、ライオンも、鷺^{わし}も、雷鳥も、角を生^はやした鹿^{しか}も、
鷺^{がちよう}鳥も、蜘蛛^{くも}も、水に棲^すむ無言の魚^{さかな}も、海に棲^すむヒトデも、
人の眼に見えなかった微生物も、——つまりは一切の生き物、
生きとし生けるものは、悲しい循環^{めぐり}をおえて、消え失^うせた。∴

…もう、何千世紀というものの、地球は一つとして生き物に乗せず、あの哀れな月だけが、むなしく灯火あかりをともしている。今は牧場まきばに、寝つるぎめの鶴つるの啼なく音ねも絶えた。菩提樹ぼだいじゆの林に、こがね虫の音ねずれもない。寒い、寒い、寒い。うつろだ、うつろだ、うつろだ。不気味だ、不気味だ、不気味だ。(間) あらゆる生き物のからだは、灰となって消え失せた。永遠の物質が、それを石に、水に、雲に、変えてしまったが、生き物の霊魂だけは、溶とけ合わさって一つになった。世界に遍在する一つの霊魂——それがわたしだ……このわたしだ。……わたしの中には、アレクサンドル大王の魂もある。シーザーの魂もある、シエイクスピアの魂もある、ナポレオンのも、最後に生き残った蛭ひるのたましいも、この

らずあるのだ。わたしの中には、人間の意識が、動物の本能と溶け合っている。で、わたしは、何もかも、残らずみんな、覚えていて。わたしは一つ一つの生活を、また新しく生き直している。

鬼火があらわれる。

アルカージナ　（小声で）　なんだかデカダンじみてるね。

トレープレフ　（哀願に非難をまじえて）　お母さん！

ニーナ　わたしは孤独だ。百年に一度、わたしは口をあけて物を言う。そしてわたしの声は、この空虚うつろのなかに、わびしくひび

くが、誰ひとり聞く者はない。……お前たち、青い鬼火も、聞いてはくれない。……夜あけ前、沼の毒気から生れたお前たちは、朝日のさすまでさまよい歩くが、思想もなければ意志もない、生命のそよぎもありはしない。お前のなかに、命の目ざめるのを恐れて、永遠の物質の父なる悪魔は、分秒の休みもなしに、石や水のなかと同じく、お前のなかにも、原子の入れ換えをしている。だからお前は、絶えず流転るてんをかさねている。宇宙のなかで、常住不変のものがあれば、それはただ霊魂だけだ。

（間）うつろな深い井戸へ投げこまれた囚とらわれびとのように、わたしは居場所も知らず、行く末のことも知らない。わたしにわかっているのは、ただ、物質の力の本源たる悪魔を相手の、

たゆまぬ激しい戦いで、結局わたしが勝つことになって、やがて物質と靈魂とが美しい調和のなかに溶け合わさって、世界を統^すべる一つの意志の王国が出現する、ということだけだ。しかもそれは、千年また千年と、永い永い歳^{とし}つきが次第に流れて、あの月も、きららかなシリウスも、この地球も、すべて塵^{ちり}と化したあとのことだ。……その時がくるまでは、怖^{おそ}ろしいことばかりだ。……（間。湖の奥に、紅^{あか}い点が二つあらわれる）そら、やって来た、わたしの強敵が、悪魔が。見るも怖ろしい、あの火のような二つの目……

アルカージナ 硫黄の臭^{にお}いがするわね。こんな必要があるの？

トレープレフ ええ。

アルカージナ （笑って）なるほど、効果だね。

トレープレフ お母さん！

ニーナ 人間がいないので、退屈なのだ……

ポリーナ （ドールンに）まあまあ、帽子をぬいで！ さあさ、

おかぶりなさい、風邪かぜを引きますよ。

アルカージナ それはね、ドクトルが、永遠の物質の父なる悪魔に、脱帽なすつたのさ。

トレープレフ （カツとなって、大声で）芝居はやめだ！ 沢山だ！ 幕をおろせ！

アルカージナ お前、何を怒るのさ？

トレープレフ 沢山です！ 幕だ！ 幕をおろせたら！ （と

んと足ぶみして）幕だ！（幕おりる）失礼しました！ 芝居

を書いたり、上演したりするのは、少数の選ばれた人たちのすることだということを、つい忘れていたもんで。僕はひとの^{はたけ}畠

を荒したんだ！ 僕が……いや、僕なんか……（まだ何か言いたいのが、片手を振って、左手へ退場）

アルカージナ どうしたんだろう、あの子は？

ソーリン なあ、おっ母さん、こりやいけないよ。若い者の自尊

心は、大事にしてやらなけりや。

アルカージナ わたし、あの子に何を言ったかしら？

ソーリン だって、恥をかかしたじゃないか。

アルカージナ あの子は、これはほんの茶番劇でと、自分で前触

れしてましたよ。だからこつちも、茶番のつもりでいたんだけれど。

ソーリン　まあさ、それにしたって……

アルカージナ　ところが、いぎ蓋ふたをあけてみたら、大層な力作だったわけなのね！　やれやれ！　あの子が、今夜の芝居を仕組んで、硫黄の臭いをぶんぶんさせたのも、茶番どころか、一大デモンストレーションだった。……あの子はわたしたちに、戯曲の作り方や演やり方を、教えてくれる気だったんだわ。早い話が、ま、うんざりしますよ。何かといえば、一々わたしに突っかかったり、当てこすったり、そりやまああの子の勝手だけけれど、これじゃ誰にしたってオクビが出るでしょうよ！　わがま

まな、^{うぬぼ}自惚れの強い子だこと。

ソーリン あの子は、お前のつれづれを慰めようと思ったんだよ。
アルカージナ おや、そう？ そんなら、何か当り前の芝居を出せばいいのに、なぜ選^よりに選^よって、あんなデカダンのタワ言を聴^きかせようとしたんだろう。茶番のつもりなら、タワ言でもな
んでも聴いてやりましようけれど、あれじゃ野心満々、——芸術に新形式をもたらそうとか、一新紀元を画そうとか、大した意気ごみじゃありませんか。わたしに言わせれば、あんなもの、新形式でもなんでもありやしな。ただ根性まがりなだけです。
よ。

トリゴーリン 人間誰しも、書きたいことを、書けるように書く。

アルカージナ そんなら勝手に、書きたいことを、書けるように書くがいいわ。ただ、わたしには、さわらずにおいてもらいたいのよ。

ドールン ジュピターよ、なんじは怒れり、か……（訳注 つづいて「されば非はなんじにあり」というラテンのことわざ。ドールンはこの句で、暗にアルカージナを諷したのであるが、彼女は気づかずに——）

アルカージナ わたしはジュピターじゃない、女ですよ。（タバコを吸いだす）あたし、怒おこってなんかいません。ただね、若い者があんな退屈な暇つぶしをしているのが、齒がゆいだけです。よ。あの子に恥をかかすつもりはなかったの。

メドヴェージェンコ 何がなんでも、靈魂と物質を区別する根拠はないです。そもそも靈魂にしてからが、物質の原子の集合なのかも知れんですからね。（語気をつよめて、トリゴーリンに）
で一つ、どうでしょう、われわれ教員仲間がどんな暮しをして
いるか——それをひとつ戯曲に書いて、舞台上演してみたら。
辛い^{つら}です、じつに辛い生活です！

アルカージナ ごもつともね。でももう、戯曲や原子のはなしは、
やめにしましょうよ。こんな^{いい}晩なんですもの！ 聞えて、
ほら、歌ってるのが？ （耳をすます）いいわ、とても！

ポリーナ 向う岸ですわ。（間）

アルカージナ （トリゴーリンに）ここへお掛けなさいな。十年

か十五年まえ、この湖じや、音楽や合唱がほとんど毎晩、ひつきりなしに聞えたものですわ。この岸ぞいに、地主屋敷が六つもあつてね。忘れもしない、にぎやかな笑い声、ざわめき、猟銃のひびき、それにしよっちゆう、ロマンスまたロマンスでね。……そのころ、その六つの屋敷の ジュヌ・ブルミエ花形で、人気の的だったのは、そら、ご紹介しますわ（ドールンをあごでしゃくつて）——ドクトル・ドールンでしたの。今でもこのとおりの男前ですもの、そのころときたら、それこそ当るべからざる勢いでしたよ。それはそうと、そろそろ気が咎^{とが}めてきた。可哀^{かわい}そうに、なんだつてわたし、うちの坊やに恥をかかしたのかしら？

心配だわ。（大声で）コースチャ！　せがれや！　コースチ

ヤ!

マーシャ あたし行つて、捜してみましよう。

アルカージナ ええ、お願い。

マーシャ (左手へ行く) ほおい! トレープレフさん!……ほ

おい! (退場)

ニーナ (仮舞台のかけから出てきながら) もう続きはないらしいから、あたし出て行つてもいいのね。今晚は! (アルカー

ジナおよびポリーナとキスを交す)

ソーリン ブラボー! ブラボー!

アルカージナ ブラボー! ブラボー! みんなで、感心していいんですよ。それだけの器量と、あんなすばらしい声をしなが

ら、田舎に引っこんでらっしやるなんて罪ですよ。きつと天分
がおありのはずよ。ね、いいこと？ 舞台に立つのは、あなた
の義務よ！

ニーナ まあ、あたしの夢もそうなの！（ため息をついて）で
も、実現しっこありませんわ。

アルカージナ そんなことあるもんですか。さ、ご紹介しましよ
う——こちらはトリゴリンさん、ボリース・アレクセーエヴ
イチ。

ニーナ まあ、うれしい……（どぎまぎして）いつもお作は……
アルカージナ（彼女を自分のそばに坐らせながら）そう固くな
らないでもいいのよ。有名な人だけれど、気持のさっぱりした

かたですからね。ほら、あちらが却^{かえ}つて、あがつてらっしやるわ。

ドールン もう幕をあげてもいいでしょうな、どうも気づまりで
いかん。

シヤムラーエフ (大声で) ヤーコフ、ちよつくら一つ、幕をあ
げてくれんか! (幕あがる)

ニーナ (トリゴーリンに) ね、いかが、妙な芝居でしょう?

トリゴーリン さっぱりわからなかつたです。しかし、面白く拝
見しました。あなたの演技は、じつに真剣でしたね。それに装
置も、なかなか結構で。(間) この湖には、魚がどっさりいる
でしょうな。

ニーナ ええ。

トリゴーリン 僕は釣りが好きでしてね。夕方、岸に坐りこんで、じっと浮子うきを見てるほど楽しいことは、ほかにありませんね。

ニーナ でも、いったん創作の楽しみを味わった方には、ほかの楽しみなんか無くなるんじゃないかしら。

アルカージナ (笑い声を立てて) そんなこと言わないほうがいいわ。このかた、ひとから持ちあげられると、尻しりもちをつく癖がおありなの。

シヤムラーエフ 忘れもしませんが、いつぞやモスクワのオペラ座でね、有名なあのシルヴァ(訳注 イタリアの歌手)が、うんと低いドの音を出したんです。ところがその時、折も折です

な、クレムリンの合唱隊のバスうたいが一人、天井^{さじき}棧敷に陣どつて見物してたんですが、とつぜん^{やぶ}敷から棒に、いやどうも驚くまいことか、その天井棧敷から、「ブラボー、シルヴァー！」と、やってのけた——それが完全に一オクターブ低いやつでね。……まず、こんな具合、——（低いバスで）ブラボー、シルヴァ。……満場シーンとしてしまいましたよ。（間）

ドールン 静寂^{しじま}の天使とびすぎぬ。（訳注 一座が急にシーンとしたときに言うことば）

ニーナ わたし、行かなくちや。さようなら。

アルカージナ どこへいらつしやるの？ こんなに早くから？
放しちやあげませんよ。

ニーナ パパが待ってますから。

アルカージナ なんてパパでしようね、ほんとに……（キスを交す）じゃ、仕方がないわ。お帰しするの、ほんとに残念だけれど。

ニーナ わたしだって、おいとまするの、どんなに辛いかわかりませんわ！

アルカージナ 誰かお送りするといいんだけど、心配よ。

ニーナ （おどおどして）まあそんな、いいんですの！

ソーリン （哀願するように彼女に）もつと、いてくださいよ！

ニーナ 駄目だめなんですの、ソーリンさん。

ソーリン せめて一時間——とまあいった次第でね。いいじゃあ

りませんか、ほんとに……

ニーナ（ちよつと考えて、涙声で）いけませんわ！（握手して、足早に退場）

アルカージナ 気の毒な娘さんだこと、まったく。人の話だと、あの子の母親が亡なくなる前、莫ばくだい大な財産を一文のこらず、すっかりご主人の名義に書きかえたんですつて。それを今度はあの父親が、後添いの名義にしてしまったもので、今じゃあの子、はだか同然の身の上なのよ。ひどい話ですわ。

ドールン さよう、あの子の親父おやじさんは相当な人でなしでね、一言の弁解の余地もありませんや。

ソーリン（冷えた両手をこすりながら）われわれももう行こう

じやありませんか、皆さん。だいぶじめじめしてきたわい。わたしや、脚あしがずきずきする。

アルカージナ あんたの脚は、まるで木で作ったみたい。歩くのもやつとなのね。さ、参りましょう、みじめなお爺じいさん。（彼の腕をさささえる）

シヤムラーエフ （妻に片手をさしのべて）マダーム？

ソーリン ほら、また犬が吠ほえている。（シヤムラーエフに）お願いだが、なあシヤムラーエフさん、あの犬を放してやるように言つてくださらんか。

シヤムラーエフ 駄目ですな、ソーリンさん、穀倉に泥棒がはいると困りますからな。なにしろわたしのキビが納めてあるんで

ね。(並んで歩いているメドヴェーージェンコに) 完全に一オクターブ低いやつでね、「ブラボー、シルヴァ!」それが君、専門の歌手じゃなくて、たかが教会の歌うたいなんですからね。メドヴェーージェンコ 給料はどれくらいでしょうかね、クレムリンあたりの歌うたいだと?

ドールンのほか一同退場。

ドールン (ひとり) ひよつとすると、おれは何にもわからんのか、それとも気がちがったのかも知れんが、とにかくあの芝居は気に入ったよ。あれには、何かがある。あの娘が孤独のこと

を言いだした時や、やがて悪魔の紅い目玉あかがあらわれた時にや、おれは興奮して手がふるえたつけ。新鮮で、素朴だ。……ほう、先生やって来たらしいぞ。なるべく気の引立つようなことを言つてやりたいものだ。

トレープレフ（登場）もう誰もいない。

ドールン 僕がいます。

トレープレフ 僕を庭じゆう捜しまわつてるんだ、あのマーシヤのやつ。やりきれない女だ。

ドールン ねえトレープレフ君、僕は君の芝居が、すっかり気に入っちゃった。ちよいとこう風変りで、しかも終りのほうは聞かなかつたけれど、とにかく印象は強烈ですね。君は天分のあ

る人だ、ずっと続けてやるんですね。

トレープレフはぎゅつと相手の手を握り、いきなり抱きつく。

ドールン ひゅツ、なんて神経質な。涙をためたりしてさ。……
僕の言いたいのはね、いいですか——君は抽象観念の世界にテーマを仰いだですね。これは飽く^あまで正しい。なぜなら、芸術上の作品というものは必ず、何ものか大きな思想を表現すべきものだからです。真剣なものだけが美しい。なんて蒼い^{あお}顔をしてるの！

トレープレフ　じゃあなたは——続けろと言うんですね？

ドールン　そう。……しかしね、重要な、永遠性のあることだけを書くんですな。君も知つてのとおり、僕はこれまでの生涯を、いろいろ変化をつけて、風情ふぜいを失わずに送つてきた。僕は満足ですよ。だが、まんいち僕が、芸術家が創作にあたつて味わうような精神の昂揚こうようを、ひよつと一度でも味わうことができたとしたら、僕はあえて自分をくるんでいる物質的な上うわつ面つらや、それにくつついて一切を軽蔑けいべつして、この地上からスーツと舞いあがったに相違ないな。

トレープレフ　お話中ですが、ニーナさんはどこでしょう？

ドールン　それに、もう一つ大事なのは、作品には明瞭めいりょうな、

ある決った思想がなければならんということだ。なんのために書くのか、それをちゃんと知っていないければならん。でなくて、一定の目当てなしに、風景でも賞しながら道を歩いて行ったら、君は迷子になるし、われとわが才能で身を滅ぼすことになる。

トレープレフ　（じれったそうに）どこにいるんです。ニーナさんとは？

ドールン　うちへ帰ったですよ。

トレープレフ　（絶望的に）ああ、どうしよう？　僕はあの人に会いたいんだ。……ぜひ会わなくちゃ。これから行ってこよう

……

マーシヤ登場。

ドールン (トレープレフに) まあ落着きたまえ、君。

トレープレフ とにかく行つてきます。行かなくちやならんので
す。

マーシヤ うちへおはいりになつて、ねトレープレフさん。お母
さまがお待ちかねよ。心配してらつしやるわ。

トレープレフ そう言つてください、ぼくは出かけたつて。君た
ちみんなも、どうぞ僕をほつといてくれたまえ！ ほつとい
て！ あとをつけ回さないでさ！

ドールン まあまあまあ、君……そんな滅茶なめっちゃ……いけないな

あ。

トレープレフ (涙声で) さようなら、ドクトル。感謝します……
…… (退場)

ドールン (ため息をついて) 若い、若いなあ!

マーシヤ ほかに言いようがなくなると、みなさんおっしやるの
ね——若い、若いって…… (かぎタバコをかぐ)

ドールン (タバコ入れを取上げて、茂みの中へ投げる) けがら
わしい! (間) うちの中では、カルタをやってるらしい。ど
れ、行くとするか。

マーシヤ ちよつと待って。

ドールン なんです?

マーシャ もう一ぺん、あなたに聞いて頂きたいことがあるの。

ちよつと聞いて頂きたいの。……（興奮して）わたし、うちの

父は好きじゃないけれど……あなたには、おすがりしていますの。なぜだか知らないけれど、わたし心底から、あなたが親身しんみなかたのような気がしますの。……どうぞ助けてください。ね、助けて。さもないとわたし、ばかなことをしたり、自分の生活をおひやらかして、滅茶々にしちまうわ。……もうこれ以上わたし……

ドールン どうしたんです？ 何を助けろと言うんです？

マーシャ わたし辛いつらんです。誰も、誰ひとり、この辛さがわかってくれないの！（相手の胸に頭を押しあて、小声で）わた

し、トレープレフを愛しています。

ドールン　なんてみんな神経質なんだ！　なんて神経質なんだ！
それに、どこもかしこも恋ばかりだ。……おお、まどわしの
湖よ、だ！　（やさしく）だって、この僕に一体、何がしてあ
げられます、ええ？　何が？　え、何が？

——幕——

第二幕

クロケツトのコート。右手奥に、大きなテラスのついた家。左手には湖が見え、太陽が反射してきらきらしている。そこここに花壇。まひる。炎暑。コートの手、菩提樹ぼだいじゆの老木のかげにベンチが一脚。それにアルカージナ、ドールン、マーシヤがかけている。ドールンの膝ひざには、本が開けてある。

アルカージナ　（マーシヤに）じゃ、立ってみましょう。（ふた

り立ちあがる) こうして並んでね。あんたは二十二、わたしはかれこれその倍よ。ね、ドールンさん、どつちが若く見えて？
ドールン あなたです、もちろん。

アルカージナ そうらね……で、なぜでしょう？ それはね、わたしが働くからよ、物事を感じるからよ、しよつちゆう気を使っているからよ。ところがあんたときたら、いつも一つ所にじつとして、てんで生きちやいない。……それにわたしには、主義があるの——未来を覗^{のぞ}き見しない、というね。わたしは、年のことも死のことも、ついぞ考えたことがないわ。どうせ、なるようにしかならないんだもの。

マーシャ わたしは、こんな気がしますの——まるで自分が、も

うずっと昔から生れているみたいなの。お儀式用のあの長つたらしいスカートよろしく、自分の生活をずるずる引きずってるみたいなのがね。……生きようなんて気持が、てんでなくなるのと違ってよくありますわ。(腰をおろす)でも、くだらないわね、そんなこと。奮起一番、こんな妄念もうねんは叩きたたださなくちゃいけないわ。

ドールン (小声で口ずさむ) 「ことづてよ、おお、花々」……
 (訳注 グーノーの歌劇『ファウスト』第三幕、ジーベルの詠唱より)

アルカージナ それにわたしは、イギリス人みたいにキッチンとし

ているわ。わたしはね、いいこと、いわばピンと張りつめた気

持でね、身なりだつて髪かたちだつて、いつも *Comme il faut* しゃんとして

いますよ。一あし家うちを出るにしたつて、よしんば、ほら、こ

うして庭へ出る時でも、——部屋着ブルーズのまま髪も結わずに、なん

てことがあつたかしら？ とんでもない。わたしがこうしてい

つまでも若くていられるのは、そこらの連中みたいにくうたら

な真似まねをしたり、自分を甘やかしたりしなかつたおかげですよ。

……（両手を腰にあてて、コートを歩きまわる）ほらね、——

ピヨピヨ雛ひよっ子よ。十五の小娘にだつてなつて見せるわ。

ドールン まあまあ、それはそうとして、僕は先を続けますよ。

（本を手にとつて）ええと、粉屋ねずみと鼠ねずみのところでしたね。……

ゲーノー曲



ことづてよ、おお、はな - ばな - 。

アルカージナ その鼠のところ。読んでちようだい。（腰かける）

でも、貸してごらんさい、わたしが読むわ。こんどはわたし。

（本をうけ取って、眼でさがす）鼠と……ああここだ。……

（読む）「だからもちろん、社交界の婦人たちが小説家をちやほやして、これを身边へ近づけるがごときは、その危険なること、粉屋が鼠を納屋なやに飼っておくのと一般である。にもかかわらず、小説家は依然としてヒイキにされる。かくて、女性がこれぞと思う作家に狙いねらをつけて、これをサロンに手なずけておこうという段になると、彼女はお世辞、お愛想、お追つ従しの限りをつくして包囲攻撃を加える」……ふん、フランスじゃそもくろみうかも知れないけれど、このロシアじゃ、そんな目論見もへつ

たくれもありやしない。ロシアの女はまず大抵、作家を手に入れる前に、自分のほうが首ったけの大あつあつになっちまう。いやはやだわ。手近なところで、たとえばこのわたしとトリゴーリンだつても……

ソーリンが杖つえにたよりながら登場。ならんでニーナ。そのあとからメドヴェージェンコが、空っぽの肘ひじかけ椅子いす（訳注 車のついた）を押しってくる。

ソーリン（子供をあやすような調子で）ああ、そうなの？ 嬉うれしくって堪たまらないの？ 今日（今日はみんな浮き浮きってわけかな、

早い話が？（妹に）嬉しいことがあるんだよ！ お父さんと、
ままおつ母^かさんが、トヴェーリへ行つちまつたんで、ぼくたち
まる三日というもの、のうのうと羽根がのばせるんだ。

ニーナ（アルカージナの隣に腰かけ、彼女に抱きつく）わたし
ほんとに幸福！ これでもうわたし、あなた方のものですよ。

ソーリン（自分の肘かけ椅子にかける）今日はこの人、じつに
きれいだなあ。

アルカージナ おめかしして、ほればれするみたい。（ニーナに
キスする）でも、あんまり褒^ほめ立てちやいけないわ、鬼^やが妬^やき
ますからね。トリゴーリンさんはどこ？

ニーナ 水浴び場で、釣りをしてらっしゃるの。

アルカージナ　よく飽きないものねえ！（つづけて読もうとする）

ニーナ　それ、なんですか？

アルカージナ　モーパッサンの『水の上』よ。（二、三行ほど黙読する）ふん、あとはつまらない嘘うそっぱちだ。（本を閉じる）

わたし、なんだか気持ちが落着かない。うちの子は、一体どうしたんでしようねえ？　どうしてあんなつまらなそうな、けわしい顔つきをしてるんだろう？　あの子はもう何日も、ぶっ続けに湖へばかり行って、わたしおちおち顔を見る時もないの。マーシャ　くさくさしてらっしゃるんですわ。（ニーナに向って、

おずおずと）ねえ、あの人の戯曲をどこか、読んでくださらな

い！

ニーナ （肩をすくめて）あら、あれを？　とてもつまんないのよ！

マーシャ （感激をおさえながら）あの人が自分で何か朗読なさると、眼が燃えるようにきらきらして、顔が蒼あおざめてくるんですわ。憂うれいをふくんだ、きれいな声で、身のこなしは詩人そっくり。

ソーリンのいびきが聞える。

ドールン　ごゆるりと！

アルカージナ　ねえ、ペトルーシヤ！

ソーリン　ああ？

アルカージナ　寝てらっしゃるの？

ソーリン　いいや、どうして。

間。

アルカージナ　あなたは療治をなさらない、いけないわ、兄さん。

ソーリン　療治したいのは山々だが、このドクトルが、してやる

うとおっしゃらん。

ドールン　六十の療治ですか！

ソーリン 六十になつたつて、生きたいさ。

ドールン (吐き出すように) ええ! じゃ、カノコ草そうの水薬

(訳注 カノコ草の根から製した鎮静剤) でもやるですな。

アルカージナ どこか、温泉にでも行つたらいいんじゃないかしら。

ドールン ほほう? 行くのもよし、行かないのもまたよしですな。

アルカージナ ややこしいわね。

ドールン ややこしいも何も無い。はつきりしてますよ。

間。

メドヴェーージェンコ ソーリンさんは、タバコをやめるべきでしような。

ソーリン くだらん。

ドールン いや、くだらんどころじゃない。酒とタバコは、個性を失わせますよ。シガー一本、ウオトカ一杯やったあとのあなたは、もはやソーリン氏ではなくて、ソーリン氏プラス誰かしら、なんです。自我がだんだんぼやけて、あなたは自分に対して、あたかも第三者——つまり「彼」に対するような態度になるわけです。

ソーリン (笑って) あんたは勝手に理屈をならべるがいいさ。

人生の盛りを楽しんだ人だからね。ところが僕はどうだ？ 司法省に二十八年も勤めはしたが、まだ生活をしたことがない、何一つ味わったことがない、早い話がね。だからさ、生きたくって堪らないのは、わかりきった話じゃないですか。あんたは腹がいっぱいで、泰然と構えていなさる。それで哲学に興味をもちなさる。ところが僕は、生きたいものだから、夕食にシエリー〔酒〕をやったり、シガーをふかしたり、とまあいった次第でさ。それだけの事ですよ。

ドールン 命というものは、もっと大事に扱うものです。六十になつて療治をしたり、若い時の楽しみが足りなかつたと悔んだりするのは、失礼ながら軽率というものですよ。

マーシャ　（立ちあがる）もう午食おひるの時間よ、きつと。（だらけ

た気力のない歩き方をする）足がしびれたわ。……（退場）

ドールン　ああして行つて、午食の前に「ウオトカを」二杯ひっかけろんだ。

ソーリン　わが身に仕合せのない娘こだからね、可哀かわいそうに。

ドールン　つまらんことを、ええ閣下。

ソーリン　そらそれが、腹いっぱい食つた人の理屈さ。

アルカージナ　あーあ、およそ退屈といつたら、この親愛なる田舎なかの退屈さに、まさるものなしだわね！　暑くて、静かで、誰

もなんにもせず、哲学ばかりやつて。……ねえ皆さん、こうしてごいっしょにいるのもいいし、お話を伺つてるのも楽しい

わ。だけど……ホテルの部屋に引つこもつて、書き抜きを詰めこむ時のほうが——どんなにましだか知れやしない！

ニーナ (感激して) すばらしいわ！ わたし、わかりますわ。

ソーリン むろん、都会のほうがいいさ。書齋に引つこんでる。

取次ぎなしには誰も通しはせん。用事は電話……往來にや辻馬車つじが通る、とまあいった次第でな……

ドールン (口ずさむ) 「ことづてよ、おお、花々」……

シヤムラーエフ登場。つづいて、ポリーナ。

シヤムラーエフ ほう、皆さんお揃そろいだ。こんにちは！ (アル

カージナの手に、つづいてニーナの手に接吻する）ご機嫌う
るわしくて何よりです。家内の話では、あなたのお伴ともをして今
日、町へ出かけるそうですが、ほんとでしようか？

アルカージナ ええ、そのつもりなの。

シヤムラーエフ ふむ。……それも結構ですが、しかし何に乗っ
て行かれますかな、奥さま？ 今日にはライ麦を運ぶ日なので、
男衆はみんな手がふさがっております。それに一体、どんな馬
を使うおつもりですか、ひとつ伺いたいもんで。

アルカージナ どんな馬？ 知るもんですか——そんなこと！
ソーリン うちには、よそ行きのやつがあるはずだが。

シヤムラーエフ （興奮して）よそ行きの？ では、頸輪くびわはどう

すればいいのです？ どこから持ってくればよろしいんです？

こりや驚いた！ さつぱりわからん！ ねえ奥さん！ 失礼ながら、わたしはあなたの才能を崇拜して、あなたのためなら、十年の命を投げだすのもいいと云ませんが、しかし馬は絶対ご用だてできません！

アルカージナ でも、わたしがどうしても出かけなけりやならな
いとしたりらどう？ 妙な話なこと！

シヤムラーエフ 奥さん！ あなたはわかっておいでなさらん、
農家の経営というものが！

アルカージナ (カツとして) また例の御託ごたくが始まった！ そんならよござんす、わたし今日すぐモスクワへ帰るから。村へ行

つて、馬をやとつてくるようお願いつ付けてください。それも駄目なら、駄まで歩いて行きます！

シヤムラーエフ（カツとして）そういうことなら、わたしは辞職します！ べつの支配人をおさがしなさい！（退場）

アルカージナ 毎とし夏になると、こうだわ。毎夏、わたしはここへ来て厭いやな目にあわされるんだわ！ もうここへは足ぶみもしない！（左手へ退場。そこに水浴び場がある気持。やがて、

彼女が家に歩いて行くのが見える。そのあとにトリゴーリンが、釣つりさお竿と手桶ておけをさげてつづく）

ソーリン（カツとして）理不尽にもほどがある！ 一体なんたることだ！ つくづくもう厭いやになったよ、早い話がな。即刻こ

こへ、ありつたけの馬を出させるがいい！

ニーナ（ポリーナに）アルカージナさんのような、有名な女優さんにさからうなんて！ そのお望みとあれば、たとえ気まぐれにしたって、お宅の経営よりか大切じゃありませんの？ 呆あきれて物も言えないわ！

ポリーナ（身も世もあらず）どうしろとおっしゃるの？ わたしの身にもなつてちようだい、どうすればいいと仰しやるの？

ソーリン（ニーナに）さ、妹のところへ行きましょう。……みんなで、あれが発たつて行かないように、頼んでみましょう。ね、どうです？（シャムラーエフの去った方角を見やって）まったくやりきれん男だ！ 暴君だ！

ニーナ　（彼の立とうとするのを遮りながら）坐つてらっしゃい、坐つて。……わたしたちがお連れしますわ。……（メドヴェー
 ジエンコと二人で椅子を押す）ああ、ほんとに厭だこと！……
 ソーリン　そう、まったく厭なことだ。……でもね、あの男は出
 て行きはしない。わたしが今すぐ、話をつけるからね。（三人
 退場。ドールンとポリーナだけ残る）

ドールン　厄やっかい介かいな連中だなあ。本来なら、あんたのご亭主をポ
 イとおっぽり出せばいいものを、それがとどのつまりは、あの
 年寄り婆ばあさんみたいなソーリン先生が、妹とふたりがかりで、
 詫わびを入れるのが落ちですよ。まあ見てらっしゃい！

ポリーナ　あの人は、よそ行きの馬まで野良のらへ出したんですの。

それに、こんな行き違いは毎日のことなのよ。そのためどれほどわたしが苦勞するか、わかつてくだすたらねえ！ これじや病氣になつてしまふわ。ほらね、顫えふるがついてるわ。……わたし、あの人のがさつきには愛想がつきた。（哀願するように）エヴゲーニイ、ね、大事なとしいエヴゲーニイ、わたしを引取つてちようだい。……わたしたちの時は過ぎてゆくわ、おたがいもう若くはないわ。せめて一生のおしまいだけでも、かくれたり、嘘うそをついたりせずになりたい……（間）

ドールン 僕は五十五ですよ、今さら生活を変えようたつてもう遅い。

ポリーナ わかつてるわ、そう言つて逃げをお打ちになるのも、

わたしのほかに、身近な女の人が、幾らもおありだからよ。みんな引取るわけにはいきませんものね。わかつてますわ。こんなこと言つてご免なさい、もう飽きられてしまったのにな。

ニーナが家のほとりに現われる。彼女は花を摘む。

ドールン そんなばかなことが。

ポリーナ わたし、嫉妬しつとでくるしいのよ。そりや、あなたは医者さんだから、婦人を避けるわけにはいかない。それはわかるけれど……

ドールン (近づいて来たニーナに) どうです。あちらの様子は

?

ニーナ アルカージナさんは泣いてらっしゃるし、ソーリンさんはまた喘息ぜんそくよ。

ドールン (立ちあがる) どれ行つて、カノコ草の水薬でも、ふたりに飲ませるか。……

ニーナ (彼に花をわたして) どうぞ!

ドールン こりやどうも《メルシ・ビエン》。(家のほうへ行く)
ポリーナ (いっしよに行きながら) まあ、可愛かわいらしい花だこと

! (家のほとりで、声を押し殺して) その花をちようだい!

およこしなさいつたら! (花を受けとり、それを引きむしつて、わきへ捨てる。ふたり家にはいる)

ニーナ（ひとり）有名な女優さんが、それもあんなつまらない
ことで泣くなんて、どう見ても不思議だわねえ！ もう一つ不
思議と言えば、名高い小説家で、世間の人気者で、わいわい新
聞に書き立てられたり、写真が売りだされたり、外国で翻訳ま
で出ている人が、一日じゅう釣りばかりして、ダボハゼが二匹
釣れたってにこにこしてるなんて、これも変てこだわ。わたし、
有名な人って、そばへも寄れないほどえぱりくさって、世間の
人間を見くだしているものと思っていた。家柄だの財産だのを、
無上のものと崇め奉る世間あがたてまつにたいして、自分の名誉やぱりぱり
の名声でもって、仕返しをする気なのだろうと思っていた。と
ころがどうでしょう、泣いたり、釣りをしたり、カルタをやっ

たり、笑ったり、一向みんなと違やしない。……

トレープレフ（無帽で登場。猟銃と、かもめの死骸しがいを持つ）一人つきりなの？

ニーナ ええ、そう。

トレープレフ、鴉を彼女の足もとに置く。

ニーナ どういうこと、これ？

トレープレフ 今日ぼくは、この鴉を殺すような下劣な真似まねをした。あなたの足もとに捧こげます。

ニーナ どうかなの？（鴉を持ちあげて、じっと見つめ

る)

トレープレフ (間をおいて) おっつけ僕も、こんなふうには僕自身を殺すんです。

ニーナ すっかり人が違つたみたい。

トレープレフ ええ、あなたが別人みたいになつて以来。あなたの態度は、がらり變つてしまいましたね。目つきまで冷たくなつて、僕がいるとさも窮屈そうだ。

ニーナ 近ごろあなたは怒りっぽくなつて、何か言うにもはつきりしない、へんな象徴みたいなものを使うのね。現にこの鴉にしたつて、どうやら何かの象徴らしいけれど、ご免なさい、わたしわからないの。……(鴉をベンチの上に置く) わたし単純

すぎるもんだから、あなたの考えがわからないの。

トレープレフ　ことの起りはね、僕の脚本があんなぶざまな羽目になった、あの晩からなんです。女というものは、失敗を赦ゆるしませんからね。僕はすっかり焼いちゃまった、切れっぱし一つ残さずにね。僕がどんなにみじめだか、あなたにわかったらなあ！　あなたが冷たくなつたのが、僕は怖おそろしい、あり得べからざることのような気がする。まるで目がさめてみると、この湖がいきなり干あがつていたか、地面へ吸いこまれてしまつていたみたいだ。今しがたあなたは、単純すぎるもんだから僕の考えがわからない、と言いましたね。ああ、なんのわかることがあるもんですか　あの脚本が気に入らない、それで僕のイン

スピレーションを見くびって、あなたは僕を、そのへんにうようよしている平凡なくだらん奴やつらといっしよにしてるんだ。：

：（とんと足ぶみして）わかってるさ、ちゃんと知ってるんだ！

僕は脳みそに、釘くぎをぶちこまれたような気持だ。そんなもの、僕の血をまるで蛇へびみたいにあいつに吸って吸いつくす自尊心もろとも、呪のろわれるがいいんだ。……（トリゴーリンが手帳を読みながら来るのを見て）そうら、ほんものの天才がやって来た。歩きつぶりまでハムレットだ、やつぱり本を持ってね。：

：（嘲ちやうろう弄ろう 口調で）「言葉、ことば、ことば」か……まだあの太陽がそばへこないうちから、あなたはもうにつこりして、目つきまであの光でトロンとしてしまった。邪魔はしませんよ。

(足早に退場)

トリゴーリン (手帳に書きこみながら) かぎタバコを用い、ウ
オトカを飲む。……いつも黒服と。教師が恋する……

ニーナ ご機嫌よう、トリゴーリンさん!

トリゴーリン ご機嫌よう。じつは思いがけない事情のため、わ
れわれはどうやら今日発^たつことになりそうです。あなたとまた
いつお会いできるかどうか。いや、残念です。わたしは、ごく
たまにしか若いお嬢さん——若くてしかもきれいなお嬢さんに、
会う機会がないもので、十八、九の年ごろには一体どんな気持
でいるものか、とんと忘れてしまって、どうもはつきり頭に浮
ばんです。だから、わたしの作品に出てくる若い娘たちは、

大抵作りものですよ。わたしはせめて一時間でもいいから、あなたと入れ代りになって、あなたの物の考え方や、全体あなたがどういう人かを、とつくり知りたと思いますよ。

ニーナ わたしは、ちよいちよいあなたと入れ代りになってみた
いわ。

トリゴーリン なぜね？

ニーナ 有名な、りっぱな作家が、どんな気持でいるものか、知りたいからですわ。有名って、どんな気がするものかしら？

ご自分が有名だということ、どうお感じになりました？

トリゴーリン どうって？ まあ別になんともないでしょうね。

そんなこと、ついぞ考えたこともありませんよ。（ちよつと考

えて）二つのうち、どっちかですな——わたしの名声をあなたが大げさに考えているか、それとも、名声というものがおよそ実感としてピンとこないかね。

ニーナ　でも、自分のことが新聞に出ているのをご覧になったら？

トリゴーリン　褒められればいい気持だし、やつつけられると、それから二日は不機嫌を感じますね。

ニーナ　すばらしい世界だわ！　どんなにわたし羨ましいか、それがわかってくださったらねえ！　人の運命って、さまざまなのね。退屈な、人目につかない一生を、やつとこさ曳ひきずつている、みんな似たりよつたりの、不仕合せな人たちがいるかと

思うと、一方にはあなたのように、——百万人に一人の、面白い、明るい、意義にみちた生活を送るめぐり合せの人もある。

あなたはお仕合せですわ。……

トリゴーリン わたしがね？（肩をすくめて）ふむ。……あなた

は、名声だの幸福だの、何かこう明るい面白い生活だのと仰しやるが、わたしにとっては、そんなありがたそうな言葉はみんな、失礼ながら、わたしが食わず嫌いで通しているマーマレードと同じですよ。あなたはとても若くて、とても善良だ。

ニーナ あなたの生活は、すてきな生活ですわ！

トリゴーリン ベつにいいところありませんねえ。（時計を出して見る）わたしは、これから行って書かなければならん。ま赦ゆる

してください、暇がないんです。……（笑う）あなたはね、世間で言う「人の痛い肉刺^{まめ}」を、ぐいと踏んづけなすつた。そこでわたしは、このとおり興奮して、いささか向つ腹を立てているんです。だがまあ、しばらくお話しましょうか。そのわたしの、すばらしい、明るい生活のことをね。……さてと、何から始めたものか？（やや考えて）強迫観念というものがありますね。人がたとえば月なら月のことを、夜も昼ものべつ考えていると、それになるのだが、わたしにもそんな月があるんです。夜も昼も、一つの考えが、しつこく私にとっついて離れない。それは、書かなくちやならん、書かなくちや、書かなくちや……というやつです。やっと小説を一つ書きあげたかと思うと、

なぜか知らんがすぐもう次のに掛からなければならん、それから三つ目、三つ目のお次は四つ目……といった具合。まるで駆えきてい遁馬車きみたいのに、のべつ書きどおしで、ほかに打つ手がない。そのどこがすばらしいか、明るいか、ひとつ伺いたいものだ。いやはや、野蠻しやべきわまる生活ですよ！ 今こうしてあなたとお喋りしやべをして、興奮しやべしている。ところがその一方、書きかけの小説が向うで待っていることを、一瞬たりとも忘れずにいるんです。ほらあすこに、グラント・ピアノみたいなかっこう恰好の雲が見える。すると、こいつは一つ小説のどこかで使つてやらなくちや、と考える。グラント・ピアノのような雲がうかんでいた、とね。ヘリオトロープの匂においがする。また大急ぎで頭こころへ書きこ

む。甘ったるい匂い^{にお}、後家さんの色、こいつは夏の夕方の描写に使おう、とね。こうして話をしていても、自分やあなたの一言一句を片っぱしから捕^{つか}まえて、いそいで自分の手文庫のなかへほうりこむ。こりや使えるかも知れんぞ！ というわけ。一仕事すますと、芝居なり釣りなりに逃げだす。そこでほっと一息ついて、忘我の境にひたれるかと思うと、どっこい、そうは行かない。頭のなかには、すでに新しい題材という重たい鉄のタマがころげ回って、早く机へもどれと呼んでいる。そこでまたぞろ、大急ぎで書きまくることになる。いつも、しょっちゅうこんなふうで、われとわが身に責め立てられて、心のやすま^るひまもない。自分の命を、ぼりぼり食っているような気持で

す。何者か漠然ばくぜんとした相手に蜜みつを与えようとして、僕は自分の選えり抜きの花から花粉をかき集めたり、かんじんの花を引きむしったり、その根を踏み荒したりしているみたいなものです。それで正気と言えるだろうか？ 身近な連中や知り合いが、果してわたしをまともに扱ってくれてるだろうか？ 「いま何を書いておいでです？ こんどはどんなものですか？」聞くことと言ったら同じことばかり。それでわたしは、知り合いのそんな注目や、讚辞さんじや、随喜の涙が、みんな嘘っぱちで、寄ってたかってわたしを病人あつかいにして、いい加減な気休めを言っているみたいなのがする。うかうかしていると、誰かうしろから忍び寄って来て、わたしをとっつかまえ、あのポプリーシチン

（訳注　ゴーゴリの『狂人日記』の主人公）みたいに、氣違ひ病院へぶちこむんじゃないかと、こわくなることもある。それじゃ、わたしがやつと物を書きだしたころ、まだ若くて、生気にあふれていた時代はどうかというと、これまたわたしの文筆生活は、ただもう苦しみの連続でしたよ。駆けだしの文士というものは、殊ことに不遇な時代がそうですが、われながら間の抜けた、不細工な余計者みたいな気のするものでしてね、神経ばかりやたらに尖とがらせて、ただもう文学や美術にたずさわっている人たちのまわりを、ふらふらうろつき回らずにはいられない。認めてももらえず、誰の目にもはいらず、しかもこつちから相手の眼を、まともにぐいと見る勇氣もなく——まあ言ってみれ

ば、一文なしのバクチきちがいといったぎまです。わたしは自分の読者に会ったことはなかったけれど、なぜかわたしの想像では、不愛想な疑ぐりぶかい人種のように思えましたね。わたしは世間というものが恐こわかった。ものすごい怪物のような気がした。自分の新作物が上演されるようなことになる、いつもきまつて、黒い髪の毛の人は敵意を抱いだいている、明るい髪の毛の人は冷淡な無関心派だと、そんな気がしたものです。思いだしてもぞつとする！　じつになんとも言えない苦しみでした！

ニーナ　ちよつとお待ちになつて。でも、感興わが湧いてきた時や、創作の筆がすすんでいる時は、崇高な幸福の瞬間をお味わいになりませんか？

トリゴーリン それはそうです。書いているうちは愉快です。校正をするのも愉快だな。だが……いざ刷りあがってしまったと、もう我慢がならない。こいつは見当が狂った、しくじった、いっつそ書かないほうがよかったのだと、むしゃくしゃして、気が滅入るんですよ。……（笑う）ところが、世間は読んでくれて、「なるほど、うまい、才筆だな」とか、「うまいが、トルストイには及びもつかんね」とか、「よく書けてる、しかしツルゲ―ネフの『父と子』のほうが上だよ」とか、仰せおおになる。といったわけで、結局、墓にはいるまでは、明けても暮れても「うまい、才筆だ」「うまい、才筆だ」の一点ばりで、ほかに何にもありやしない。さて死んでしまうと、知り合いの連中が墓の

そばを通りかかって、こう言うでしょうよ。「ここにトリゴ
リンが眠っている。いい作家だったが、ツルゲーネフには敵わ
なかつたね」

ニーナ　でもちよつと。わたし、そんなお話は頂きかねますわ。
あなたは、成功に甘えてらつしやるんだわ。

トリゴリン　どんな成功にね？　わたしはついで、自分でいい
と思つたことはありませんよ。わたしは作家としての自分が好
きじゃない。何よりも悪いことに、わたしは頭がもやもやして
いて、自分で何を書いているのかわからないんです。……わた
しはほら、この水が好きだ。木立や空が好きだ。わたしは自然
をしみじみ感じる。それはわたしの情熱を、書かずにいられな

い欲望をよび起す。ところがわたしは、単なる風景画家だけじゃなくて、その上に社会人でもあるわけだ。わたしは祖国を、民衆を愛する。わたしは、もし自分が作家であるならば、民衆や、その苦悩や、その将来について語り、科学や、人間の権利や、その他いろんなことについても語る義務がある、と感じるわけです。そこでわたしは、何もかも喋ろうとあせる。わたしは四方八方から駆り立てられ、叱りとばされ、まるで獵犬に追いつめられた狐きつねながら、あっちへすつ飛び、こっちへすつ飛びしているうちに、みるみる人生や科学は前へ前へと進んで行ってしまい、わたしは汽車に乗りおくれた百姓みたいに、ずんずんあとにとり残される。で、とどのつまりは、自分にできる

のは、自然描写だけだ、ほかのことにかけては一切じぶんは二セ物だ、骨の髄まで二セ物だ、と思っちまうんですよ。

二ーナ あなたは過労のおかげで、自分の値打ちを意識するひまも気持も、ないんですわ。たとえばご自分に不満だろうとなんだろうと、ほかの人にとってはあなたは偉大でりっぱな方なのよ！ もしわたしが、あなたみたいな作家だったら、自分の全生命を民衆に捧^{ささ}げてしまおうわ。でも心のなかでは、民衆の幸福はただ、わたしの所まで向上してくることだと、はつきり自覚しますわ。すると民衆は、わたしを祭礼の馬車に乗せて引きまわしてくれるわ。

トリゴーリン ほう、祭礼の馬車か。……アガメンノンですかね、

このわたしが！（ふたり微笑する）

ニーナ 女流作家とか女優とか、そんな幸福な身分になれるものなら、わたしは周囲の者に憎まれても、貧乏しても、幻滅しても、りっぱに堪えてみせますわ。屋根うら住まいをして、黒パンばかりかじって、自分への不満だの、未熟さの意識だのに悩んだってかまわない。その代り、わたしは要求するのよ、名声を……ほんとうの、割れ返るような名声を。……（両手で顔をおおう）頭がくらくらする……ああ！

アルカージナの声（家の中から）トリゴーリンさん！

トリゴーリン わたしを呼んでいる。きつと荷づくりでしょう。

だが、発^たちたくないなあ。（湖の方を振返って）なんという自

然の恩恵だ！……すばらしい！

ニーナ 向う岸に、家と庭が見えるでしょう？

トリゴーリン ええ。

ニーナ あれが、亡なくなつた母の屋敷です。わたし、あすこで生れたの。それからずっと、この湖のそばで暮しているものだから、どんな小さな島でもみんな知っていますわ。

トリゴーリン ここはまったくすばらしい！
(かもめを^{かもめ}見とめて)

なんです、これは？

ニーナ かもめよ。トレープレフさんが射うつたの。

トリゴーリン きれいな鳥だ。いや、どうも発ちたくないなあ。

ひとつアルカージナさんを説きつけて、もつといるようにして

ください。(手帳に書きこむ)

ニーナ なに書いてらっしやるの？

トリゴーリン ちよつと書きとめとくんです。……題材が浮んだものでね。……(手帳をしまいながら)ほんの短編ですがね、湖のほとりに、ちようどあなたみたいな若い娘が、子供の時から住んでいる。鷗のように湖が好きで、鷗のように幸福で自由だ。ところが、ふとやって来た男が、その娘を見て、退屈まぎれに、娘を破滅させてしまう——ほら、この鷗のようですね。

間。——やがて窓にアルカージナが現われる。

アルカージナ トリゴーリンさん、どこにいらつしやるの？

トリゴーリン 今すぐ！ （行きかけて、ニーナを振返る。窓の

そばでアルカージナに）なんですか？

アルカージナ わたしたち、このままいることにしますわ。

トリゴーリン、家へはいる。

ニーナ （脚光ちかく歩みよる。やや沈思ののちに）夢だわ！

——幕——

第三幕

ソーリン家の食堂。左右にドア。食器棚^{だな}。薬品の戸棚。部屋の中央にテーブル。旅行カバンが一つ、帽子のボール箱が幾つか。出立^{しゅったつ}の用意が見てとられる。トリゴールンが朝食（訳注 だいたい早おひるの時刻）をしたため、マーシャはテーブルのそばに立っている。

マーシャ これはみんな、作家としてのあなたにお話しするんです。お使いになってもかまいません。良心にかけて言いますけ

れど、あの人の傷が重傷だったら、わたし一分間たりと生きてはいなかったでしょう。でも、わたしはこれで勇気があります。だから、きつぱり決心しました。この恋を胸こゝろから引っこ抜いてしまおうと。根ごと一思いにね。

トリゴーリン　どんな具合にね？

マーシャ　嫁に行くんです。メドヴェーージェンコのところへ。

トリゴーリン　あの教師せんせいのところへね？

マーシャ　ええ。

トリゴーリン　わからんな。なんの必要があつて。

マーシャ　望みもないのに恋をして、何年も何年も何か待っているなんて……。いったん嫁に行つてしまえば、もう恋どころじ

やなくなつて、新しい苦勞で古いことはみんな消されてしまう。それだけでも、ね、変化じゃありませんか。いかが、もう一つ？

トリゴーリン 過ぎやしないかな？

マーシヤ なあに、平氣！（一杯ずつつぐ）そんなに人の顔を見ないでください。女というものは、あなたの考えてらつしやるより、よく飲みますわよ。わたしみたいに大つぴらにやるのは少ないけれど、こつそり飲むのは大勢いますわ。そうよ。しかもきまつて、ウオトカかコニヤツクですわ。（杯を当てて）プロジット！ あなたは、さっぱりした方ね。お別れするの残念ですわ。（ふたり飲みほす）

トリゴーリン わたしだって、発^たちたくはないんだが。

マーシヤ だからあの人に、もつといるようにお頼みになったら。

トリゴーリン いや、もういるつもりはないでしょう。なにしろ

あの息子^{むすこ}が、でたらめばかりやらかすんでね。ピストル自殺を

やりかけたと思えば、今度はこのわたしに、決闘を申しこむと

かなんとかいう話だ。一体なんのためかな？ ふくれたり、鼻

を鳴らしたり、新形式論をまくし立てたり……。いや、座席は

まだたつぷりあいている。新しいものにも古いものにもね、――

――何も押し合うことはない。

マーシヤ それに嫉妬^{しつと}も手伝ってね。でも、わたしの知った事じ

やないわ。

間。ヤーコフが左手から右手へ、トランクをさげて通る。

ニーナが登場して、窓ぎわに立ちどまる。

マーシャ わたしのあの教師せんせいは、大してお利口さんじゃないけれど、なかなかいい人だし、貧乏だし、それにとってもわたしを愛してくれるの。いじらしくなりますわ。年とつたお母さんも、可哀かわいそうだし、では、ご機嫌よろしゅう。わるくお思いにならないでね。（かたく握手する）ご親切にいろいろありがとうございますございました。ご本が出たらお送りくださいね、きつと署名なすってね。ただ、「わが敬愛する」なんてしないで、ただあつさ

り、「身もとも不明、なんのためこの世に生きるかも知らぬマリヤへ」としてね。さようなら！（退場）

ニーナ（握り拳こぶしにした片手を、トリゴーリンのほうへさしのべながら）偶数？ 奇数？

トリゴーリン 偶数。

ニーナ（ため息をついて）いいえ。手の中には、豆が一つしかないの。わたし占ってみたのよ、女優になろうか、なるまいかって。誰か、こうしたらと言ってくれればいいんだけど。

トリゴーリン そんなこと、言える人があるものですか。（間）

ニーナ お別れですわね……多分もう二度とお目にかかる時はないでしょう。どうぞ記念に、この小さなロケットをお受けにな

つて。あなたの頭かしら文字を彫しらませましたの……こちら側には

『昼と夜』と、あなたのご本の題をね。

トリゴーリン　じつに優美だ！　（ロケットに接せつぷん吻する）何よ

りの贈物です！

ニーナ　時にはわたしのことも思い出してね。

トリゴーリン　思い出しますとも。その思い出すのは、あの晴れた日のあなたの姿でしょうよ——覚えてますか？——一週間まえ、あなたが薄色の服を着てらした時のことを……いろんな話をしましたっけね……それにあの時、ベンチに白いかもめ鴉がのせてあつた。

ニーナ　（物思わしげに）ええ、かもめが……（間）もうお話し

てはいられません、人が来ます。……お発ちになる前、二分だけわたしにくださいまし、お願い。……（左手へ退場。同時に右手から、アルカージナ、燕尾服えんびふくに星章をつけたソーリン、それから荷作りに大童おおわらわのヤークフが登場）

アルカージナ お年寄りは、ここにじつとしてらっしやいよ。そんなリヨーマチのくせに、お客に出あるく法があるものですか？（トリゴーリンに）いま出て行ったのは誰？ ニーナですの？

トリゴーリン ええ。

アルカージナ 失礼パルドン、お邪魔しましたわね……（腰をおろす）

さあ、どうにかすつかり片づいた。へとへとよ。

トリゴーリン（ロケットの字を読む）『昼と夜』、百二十一ペ

ージ、十一と二行。

ヤーコフ（テーブルの上を片づけながら）釣竿つりざおもやはり入れ
ますんで？

トリゴーリン　そう、あれはまだ要いるからね。本はみな誰かにや
つてくれ。

ヤーコフ　かしこまりました。

トリゴーリン（ひとりごと）百二十一ページ、十一と二行。は
て、あすこには何が書いてあったつけ？（アルカージナに）

この家に、わたしの本があつたかしら？

アルカージナ　兄の書齋の、隅すみつこの棚にありますよ。

トリゴーリン 百二十一ページと……（退場）

アルカージナ ね、ほんとにペトルーシヤ、ここにじつとしていらつしやいよ……

ソーリン お前たちが発たつて行くと、あとにぽつねんとしてるのは辛つらくてな。

アルカージナ じゃ、町へ行けばどうなの？

ソーリン 格別どうということもないが、だがやつぱりな……

（笑う） 県会の建物の建て前もあるし、とまあいった次第でな。

……せめて一時間でも二時間でも、この穴ごもりのカマス（訳注 シチエドリーンの童話『かしこいカマス』より）みたいな生活から飛び出したいんだよ。そうでもしないと、わたしは古

パイプみたいに、柵のすみですっかり埃まみれだからな。一時
に馬車を回すように言いつけたから、いつしよに出かけよう。
アルカージナ（間をおいて）じや、ここでお暮しなさいね、退
屈がらずに、お風邪を召さずにね。あの子の監督をおねがいし
ますよ。よく気をつけてやってね。導いてやってね。（間）こ
うしてわたしが発つてゆけば、なぜコンスタンチンがピストル
自殺をしようとしたのか、それも知らずじまいになるのね。ど
うやらわたしには、おもな原因は嫉妬しつとだったような気がする。
だから一刻も早くトリゴーリンを、ここから連れ出したほうが
いいのよ。

ソーリン さあ、なんと行ったものかな？ ほかにも原因はあつ

たろうき。論より証拠——若盛りの頭のある男が、草ぶかい田舎ぐらしなかをしていて、金もなければ地位もなく、未来の望みもないときてるんだからな。なんにもすることがない。そのぶらぶら暮しが、恥ずかしくもあり空怖ろしくもあるんだな。わたしはあの子が可愛かわいくてならんし、あれのほうでもわたしに懐なついてくれるが、だがやっぱり早い話が、あれは自分がこの家の余計もんだ、居い候そうろうだ、食客だという気がするんだ。論より証拠、だいいち自尊心がな……

アルカージナ あの子には、ほんとに泣かされるわ！（考えこんで）勤めに出てみたらどうかしら……

ソーリン （口笛を鳴らし、やがてためらいがちに）わたしはね、

いちばんの上策は、もしもお前が……あの子に少しばかり金を持たしてやったらどうかと思うよ。何はさておき、あの子も人並の身なりはせにやならんし、とまあいった次第でな。見てごらん、着たきり雀すずめのぼろフロックを、これでもう三年ごし引きずって、がいとう外套も着てない始末じゃないか。……（笑う）それに若い者にや、少し気晴らしをさせるもよかろうて。……ひとつ外国へでも出してみるかな。……なあに、大して金もかかるまい。

アルカージナ でもねえ。……まあ、服ぐらいは作ってやれるでしょうけど、外国まではねえ。……いいえ、今のところは、服だって駄目だわ。（きつぱりと）わたし、お金がありません！

ソーリン笑う。

アルカージナ　ないのよ！

ソーリン　（口笛を鳴らす）なるほどな。いやご免ご免、堪忍かにしておくれ。お前の言うとおりでろうとも。……お前は気前のいい、鷹揚おうような女だからな。

アルカージナ　（涙ぐんで）わたし、お金がありません！

ソーリン　わたしに金さえありや、論より証拠、ほんとあれに出してやるがな、あいにくとすってけてん、五錢玉一つない。

（笑う）わたしの恩給は、のこらず支配人が取りあげおって、

農作だ牧畜だ蜜蜂みつばちだと使いまわす。そこでわたしの金は、元

も子もなくなつちまう。蜂は死ぬ、牛もくたばる。馬だって、
ついぞわたしに出してくれたためしがない。……

アルカージナ それはわたしだつて、お金のないことはないけれど、なにせ女優ですものね。衣いしやう裳代だけでも身代かぎりしちまうわ。

ソーリン お前はいい子だ、可愛い女だ。……わたしは尊敬しているよ。……そうとも。……だが、わたしはまた、どうもなんだか……（よろめく）目まいがする。（テーブルにつかまる）
気持が悪い、とまあいった次第でな。

アルカージナ （仰天して）ペトルーシャ！（懸命に彼をささえながら）ペトルーシャ、しっかりして……（叫ぶ）誰か来て。

誰か早く！……

頭に包帯したトレープレフと、メドヴェーージェエンコ登場。

アルカージナ 気持ちが悪くなったのよ！

ソーリン いやなに、なんでもない……（ほほえんで、水を飲む）

もう直った……とまあいった次第でな。……

トレープレフ（母親に）びつくりしないで、ママ、べつに危険はないから。伯父さんは近ごろちよいちよい、これが起るんです。（伯父に）伯父さん、少し横になるんですね。

ソーリン うん、ちよつぴりな。……だが、とにかく町へは行く

よ。……ひと休みして出かける……論より証拠だ……（杖つえにす

がりながら歩く）

メドヴェージェンコ（腕を支えてやりながら）こんな謎なぞなぞ々々が

ありますよ。朝は四つ足、昼は二本足、夕方は三本足……

ソーリン（笑う）そのとおり。そして、夜にや仰向けか。いや

ありがとう、もう一人で行けますよ……

メドヴェージェンコ ほらまた、そんな遠慮を！……（彼とソー

リン退場）

アルカージナ ああ、びつくりした！

トレープレフ 伯父さんには、田舎ぐらしが毒なんだ。くさくさ
するんですよ。もしママが、気前よくポンと千五百か二千貸し

てあげたら、あの人まる一年は町で暮せるのになあ。

アルカージナ わたしにお金があるもんですか。わたしは女優で、銀行家じゃないもの。

間。

トレープレフ ママ、包帯を換えてくれませんか。あなたは上^{じょう}手^ずだから。

アルカージナ (薬品戸棚からヨードホルムと包帯箱を取り出す)
ドクトルは遅いこと。

トレープレフ 十時ごろって言ってたのに、もうお午^{ひる}だ。

アルカージナ お坐り^{すわ}。(彼の頭から包帯をとる) まるでターバ
ンをしてるみたいだねえ。きのう、よそ者が台所へ来て、お前
のことをなに人か^{じん}と聞いていたつけ。でも、ほとんどもう癒^{なお}つ
たようだね。あとはほんのちよつぴりだ。(彼の頭に接吻^{せつぶん}
する) わたしがいなくなつてから、またパチンとやりはしないだ
ろうね？

トレープレフ やりやしませんよ、ママ。あるとき僕、とてつも
なく絶望しちまつて、つい自制できなかつたんです。もう二度
とやりはしません。(母の手に接吻する) ああ、この手——お
母さんは、じつにまめな人ですね。おぼえてますよ、ずっと昔
のこと、あなたがまだ国立の劇場に出ていたころ、——僕はほ

んの子供だったけれど、——アパートの中庭でけんかがあつて、
店子の洗濯女がひどくたなこなぐられたことがあつたつけ。ね、おぼ
えてますか？ 氣絶したその女を、みんなで抱きあげて……そ
れからお母さんは、しじゅうその女を見舞いに行つて、薬を持
つてつてやったり、子供たちにおけ桶で行水を使わしたりしました
ね。あれ、おぼえてないかしら？

アルカージナ 忘れたわ。(新しい包帯を巻いてやる)
トレープレフ うちと同じアパートに、あのころバレリーナが二
人住んでいて……よくお母さんのところへ、コーヒーを飲み
来たつけ……

アルカージナ それは、おぼえていますよ。

トレープレフ ふたりとも、じつに信心ぶかい人でしたね。(間)
このごろ、あれ以来の幾日かというもの、僕はまるで子供のこ
ろに返ったみたいに、甘えたいような気持で、ただもう一すじ
に、お母さんを愛しています。あなたのほかに、今じや僕には
誰ひとりいないんです。ただね、なんだってお母さんは、あ
んな男に引きずり回されるんです、なぜです？

アルカージナ お前は、あの人がわからないんだよ。えコンスタ
ンチン。あの人は、人格の高いりっぱな人ですよ……

トレープレフ ところが、僕が決闘を申しこもうとしていると人
から聞くと、人格者たちまち変じて卑怯者ひきょうものになつちまつたつ
てね。いよいよ発たつんでしよう。見ぐるしい脱走だ！

アルカージナ　ばかをお言い！　ここを発つように頼んだのは、このわたしですよ。

トレープレフ　人格の高いりっぱな人か！　やつこさんのおかげで、このとおり母子げんかおやこになりかけてるといふのに、今ごろご本人は客間か庭のどこかで、われわれをせせら笑っていることでしょうか……ニーナを大いに啓発して、彼こそ天才だということを、徹底的にあの子の胸たに叩きこもうと、大童の最中でしょうよ。

アルカージナ　お前は、わたしに厭いやがらせを言うのが楽しみなんだね。わたしはあの人を尊敬しているのだから、わたしの前じやあの人のことを悪く言わないでもらいたいね。

トレープレフ　ところが僕は尊敬していない。お母さんは、僕にまであの男を天才だと思わせたいんでしようが、僕は嘘うそがつかないもんで失礼——あいつの作品にや虫酸むしずが走りますよ。

アルカージナ　それが妬ねたみというものよ。才能のなくせに野心ばかりある人にや、ほんものの天才をこきおろすほかに道はないからね。結構なお慰みですよ！

トレープレフ　（皮肉に）ほんものの天才か！　（憤然として）

こうなつたらもう言っちゃまうが、僕の才能は、あんたがたの誰よりも上なんだ！　（頭の包帯をむしりとる）あんたがた古い

殻からをかぶつた連中が、芸術の王座にのしあがって、自分たちのすることだけが正しい、本物だと極きめこんで、あとのものを迫

害し窒息させるんだ！ そんなもの、誰が認めてやるもんか！

断じて認めないぞ、あんたも、あいつも！

アルカージナ デカダン……！！

トレープレフ さつさと古巢の劇場こやへ行つて、気の抜けたやくざ

芝居にでも出るがいいや！

アルカージナ はぼか 憚りながら、そんな芝居に出たことはありません

よ。わたしにはかまわないどくれ！ お前こそ、やくざな茶ボード

ビル 番ひとつ書けないくせに。キーエフの町人！ 居候いそろう！

トレープレフ けちんぼ！

アルカージナ 宿なし！

トレープレフ腰をおろして、静かに泣く。

アルカージナ　いくじなし！　（興奮してふらふら歩きながら）

泣くんじやない。泣かないでもいいの。……（泣く）いいんだ

よ。……（息子の額むすこや頬や頭にキスする）可愛いわたしの子、

堪忍かにしておくれ。……罪ぶかいお母さんを赦ゆるしておくれ。不仕

合せなわたしを赦しておくれ。

トレープレフ　（母親を抱いて）僕の気持がお母さんにわかったらなあ！　僕は何もかも、すっかり失なくしてしまった。あの人は僕を愛していない、僕はもう書く気がしない……希望がみんな消えちまったんだ……

アルカージナ　そう気を落すんじゃない。……みんなうまく行きますよ。あの人は今すぐ発つていくし、あの子もまたお前が好きになるよ。（息子の涙を拭^ふいてやる）さ、もういい。これで仲直りよ。

トレープレフ　（母親の手にキスして）ええ、ママ。

アルカージナ　（やさしく）あの人とも仲直りしてね。決闘なんぞいるものかね。……ね、そうだね。

トレープレフ　え、いいです。……ただね、ママ、あの男と顔を合せないで済むようにしてください。思っただけでも辛いんです……とても駄目なんです……（トリゴリン登場）ほら来た。僕出ていきます。……（手早く薬品を戸棚にしまう）包帯はい

ずれ、ドクトルにしてもらいます……

トリゴーリン（本のページをさがしながら）百二十一ページ：
…十一と二行。……これだ。……（読む）「もしいつか、わた
しの命がお入り用になったら、いらして、お取りになってね」

トレープレフ、床の包帯をひろって退場。

アルカージナ（時計をちらと見て）そろそろ馬車が来ますよ。
トリゴーリン（ひとりごと）もしいつか、わたしの命がお入り
用になったら、いらして、お取りになってね。

アルカージナ あなたの荷づくりは、もうできたでしょうね？

トリゴーリン　（もどかしげに）ええ、ええ……（考えこんで）

この清らかな心の呼びかけのなかに、なぜおれには悲哀の声が聞えるんだろう。なぜおれの胸は、切ないほどに緊めつけられるんだろう？……もしいつか、わたしの命がお入り用になったら、いらして、お取りになってね。（アルカージナに）もう一日、いようじゃないか！

アルカージナ、かぶりを振る。

トリゴーリン　ね、いようじゃないか！

アルカージナ　あなた、何に後ろ髪を引かれてらっしやるか、わ

たしちやんと知っていますよ。でも、自制力がなくちや駄目。
ちよつぱり酔つてらつしやる、正気におなりなさい。

トリゴーリン 君もひとつ正気になつてもらいたいな。聡そうめい明な、
分別のある人間になつて、お願いだから、この問題をじっくり
見ておくれ、真実の友としてね。……（女の手を握つて）君は
犠牲になれる人だ。……僕の親友になつてくれ、僕を行かせて
おくれ……

アルカージナ （すつかり興奮して）そんなに夢中なの？

トリゴーリン どうしても惹ひきつけられるんだ！ ひよつとする
と、これこそ僕の求めていたものかも知れない。

アルカージナ たかが田舎娘の愛がね？ あなたはなんて自分を

知らないんでしようね！

トリゴーリン　時どき人間は、歩きながら眠ることがある。まさにそのとおりこの僕も、こうして君と話をしているながら、じつはうとうとして、あの子の夢を見ているようなものだ。……なんともしえない甘い夢想の、とりこになってしまったんだ。……行かせておくれ。

アルカージナ　（ふるえながら）厭いや、厭。……わたしは平凡な女だから、そんな話は、お門かどちがいよ。……いじめないで、わたしを、ボリース。……わたし、こわい……

トリゴーリン　その気になりさえすりや、非凡な女になれるんだ。幻の世界へ連れていってくれるような、若々しい、うっとりさ

せる、詩的な愛——この世でただそれだけが、幸福を与えてくれるのだ！ そんな愛を、僕はまだ味わったことがない。……若いころは、雑誌社へお百度をふんだり、貧乏と闘ったりで、そんなひまがなかった。今やっとそれが、その愛が、ついにやってきて、手招きしているんだ。……それを避けなければならん理由が、どこにある？

アルカージナ （憤然と）気がちがったのね！

トリゴーリン それでもかまわん。

アルカージナ あんたがたは今日、言い合せたように、寄ってたかってわたしをいじめめるのね！ （泣く）

トリゴーリン （自分の頭をかかえて）わかってくれない！ て

んでわかろうとしないんだ！

アルカージナ　ほんとにわたし、そんなに老^ふけて、みつともなくなつてしまつたの？　わたしの前で、ほかの女の話の大つぴらにやれるなんて！　（男を抱いてキスする）ああ、あなたは正気じゃないのよ！　わたしの大事な、いとしいひと……。あなたこそ——わたしの一生の最後のページよ！　（ひざまずく）

わたしの悦^{よろこ}び、わたしの誇り、わたしの無量の幸福……。　（彼の膝^{ひざ}を抱く）たとえ一時間でもあなたに棄^すてられたら、わたしは生きちやいない、気がちがつてしまう。わたしのすばらしい、輝かしい人、わたしの王さま……

トリゴーリン　人が来ますよ。　（女をたすけ起す）

アルカージナ いいじゃないの。あなたを愛しているこの気持が、誰に恥ずかしいものですか。（男の両手にキスする）わたしの大事な宝もの、向う見ずな悪いひと、あなたはばかなまねがしたいんでしようけれど、わたしは厭いやです、放しません。……

（笑う）あなたは、わたしのものなの、わたしのものよ。この額ひたいもわたしのもの。この眼もわたしのもの。このきれいな、絹のような髪の毛も、やっぱりわたしのもの。……あなたはすっかり、わたしのもの。あなたは本当に天才で、聡明で、今のどの作家よりもりっぱで、ロシアのただ一つの希望なのよ。……あなたの筆には、まごころがこもって、じつにすつきりして、新鮮で、おまけに健康なユーモアがあるわ。……あなたはほん

の一刷毛^{はけ}で、人物や風景のカン所が出せるのね。あなたの人物は生きているわ。あなたのもものを読んで、夢中になれずにいられるものですか！　これがお世辞だと思いの？　わたしのおべつかなの？　さ、わたしの眼を見てちようだい……よく見て……。わたしが嘘^{うそ}つきに見えて？　そらごらんささい、あなたの偉さのわかるのは、わたしだけよ。本当のことをあなたに言うのも、わたしだけよ、ね、大事な、可愛^{かわい}いひと。……発^たつでしようね？　そうでしょ？　わたしを棄てはしないことね？

トリゴーリン　おれには自分の意志というものがない。……おれはついで、自分の意志をもった例^{ため}しがないのだ。……気の抜けた、しんのない、いつも従順な男——一体これで女にもてるも

のだろうか？ さ、つかまえて、どこへなり連れて行ってくれ。ただね、一足もそばから放すんじゃないぞ……

アルカージナ (ひとりごと) これで、わたしのものだ。(けろりと、どこを風が吹くといった調子で) でもね、もしお望みなら、お残りになってもいいことよ。わたしは一人で発つから、あなたはあとで、一週間もしたら帰ってらっしゃい。あなたはべつに、急ぐ用もないんですものね。

トリゴーリン いや、こうなったらいっしょに発とう。

アルカージナ お好きなように。いっしょならいっしょでいいわ。

……
(間)

トリゴーリン、手帳に書きこむ。

アルカージナ　なんですよ、それ？

トリゴーリン　けさ、うまい言い方を聞いたもんでね。「処女の

林……」だとき。これは使える。（伸びをする）じゃ、出かけ

るんだね？　また自動車か、停車場、食堂、カツレツ、おしやべ

り……

シヤムラーエフ　（登場）まことに残念ながら、申しあげます、

馬車をお回しました。どうぞ奥さま、停車場へお出かけの時

刻です。汽車は二時五分に着きます。それではアルカージナさ

ま、おそれいます、役者のスズダーリツエフが今どこにい

ますか、お忘れなくお調べねがいますよ。生きているかな？

達者ですか？　むかしはいつしよに飲んだものでしたっけ。

あの『郵便強盗』（訳注　十九世紀末のメロドラマの題）なん

かやらせると、天下一品でしたな。……あれといっしよに、さ

よう、エリサヴェトグラードで悲劇役者のイズマイロフが出て

おりましたが、これまたなかなかの傑えらぶつ物でしてな。……いや

奥さま、そうお急ぎになることはありません、まだ五分は大丈

夫です。あるメロドラマでね、連中が謀むほんにん叛人をやった時でし

たが、不意に捕とり手が踏みこむところで「残念、ワナにかかつ

たか」と言うべきところを、イズマイロフは——「残念、ナワ

にかかつたか」とやってね……（哄こうしやう笑する）ナワにかかつ

たか！

彼がしゃべっている間に、ヤーコフは旅行カバンの世話をやき、小間使は帽子やマントやコウモリや手袋を、アルカージナに持ってくる。皆々アルカージナの身支度を手伝う。左手のドアから料理人がのぞきこみ、しばらくためらった後、おずおずとはいつてくる。ポリーナ、やがてソーリン、メドヴェージェンコ登場。

ポリーナ（手かごを持って）このスモモを、どうぞ道中めしあがって……。大そう甘うございますよ。何か変わったものも、欲

しくおなりかも知れませんか……

アルカージナ まあ御親切ごにね。ポリーナさん。

ポリーナ ご機嫌よろしゅう、奥さま！ 不行届きのことがあります

ましたら、お赦してくださいまし。（泣く）

アルカージナ （彼女を抱いて）みんな結構でしたよ、結構でしたよ。ただその、泣くのがいけないわ。

ポリーナ わたくしたちの時は過ぎて行きますもの！

アルカージナ 仕方のないことよ！

ソーリン （トンビに中折れ帽をかぶり、ステツキを持って左手のドアから登場。部屋を横ぎりながら）お前、もう時間だよ。

おくれたら事だからな、早い話が。わたしは行って乗りこんで

るよ。(退場)

メドヴェージェエンコ 僕は停車場まで歩いて行きます……お見送りからね。ひとつ急いで……(退場)

アルカージナ さようなら、皆さん。……おたがい無事で達者だったら、また夏お目にかかりましょうね。……(小間使、ヤーコフ、料理人、それぞれ彼女の手にキスする) わたしを忘れてないでね。(料理人に一ループリやって) この一ループリ、三人でお分け。

料理人 どうもありがとうございます、奥さま。道中ごぶじで！
何かとよくして頂きました！

ヤーコフ どうぞ、ご息災で！

シヤムラーエフ　ちよいと一筆お手紙を頂きたいもので！　ご機嫌よう、トリゴーリンさん！

アルカージナ　どこだろう、コンスタンチンは？　わたしは発^たちますって、あの子に言っておくれ。お別れをしなくては。じゃ皆さん、悪く思わないでね。（ヤーコフに）コツクさん一ルーブリ渡しましたよ。あれは三人分だからね。

一同右手へ退場。舞台空虚。舞台うらで、見送りによくあるざわめき。小間使がもどってきて、テーブルからスモモの籠^{かご}をとり、ふたたび退場。

トリゴーリン　（もどつてくる）ステツキを忘れたぞ。たしかテラスにあるはずだが。（行きかけて、左手のドアのところで、はいつてくるニーナに出あう）ああ、あなたか？　われわれはもう発ちます。

ニーナ　まだお目にかかれるような気が、してましたわ。（興奮して）トリゴーリンさん、わたしきっぱり決心しました。賽さいは投げられたんです、わたし舞台に立ちます。あしたはもう、ここにはいません。父のところを出て、一切をすてて、新しい生活を始めます。……わたしも、あなたと同じに……モスクワへ発ちます。あちらでお目にかかりましょう。

トリゴーリン　（ちらと後ろを振り返って）宿は、「スラヴァンス

キイ・バザール」(訳注 モスクワの有名なホテル)になさい。
……そしてすぐ僕に知らせて……モルチャーノフカ、グロホー
リスキイ館。……いまは急ぐから……(間)

ニーナ もう一分だけ……

トリゴーリン (小声で) あなたは、なんてすばらしい……。あ
あ、またすぐ会えるかと思うと、じつに幸福だ! (彼女は男

の胸にもたれかかる) 僕はまた見られるのだ——この魅するよ
うな眼を、なんとも言えぬ美しい優しい微笑を……この柔かな
顔だちを、天使のように清らかな表情を。……僕の大事な……
(長いキス)

○第三幕と第四幕のあいだに二年経過。

第四幕

ソーリン家の客間の一つ。今はトレープレフが仕事部屋に使っている。右手と左手にドアがあつて、それぞれ奥の間へ通じる。正面はテラスへ出るガラス戸。ふつうの客間用の調度のほかに、右手の隅すみに書きものデスク、左手ドア寄りにトルコ風の長椅子ながいす、書棚。窓や椅子のそこここに本。

——宵よい。笠かさつきのランプが一つともっている。薄暗い。木立のざわめきや、煙突のなかで風のうなる音がする。夜番の拍子木ひょうしぎの音。メドヴェージェンコとマーシャ登場。

マーシャ（呼ぶ）トレープレフさん！ トレープレフさん！

（見まわしながら）だあれもない。爺さんじいたら、のべつ幕なしに聞きどおしなんだもの、コースチャはどこにいる、コースチャはどこにいるって。……あの人がないじゃ、生きてられないのね……

メドヴェージェンコ 孤独がこわいんだ。（耳をすます）なんてすご凄（すご）い天気だ！ これでもう二昼夜だからな。

マーシャ（ランプの火を大きくして）湖には波が立ってるわ。
大きな波が。

メドヴェージェンコ 庭はまっ暗だ。ひとつこわ毀す（こわ）ように言わなけ

りやいかな、庭のあの小劇場はね。むき出しで、醜く立っているざまは、まるで骸骨だ。幕は風でばたついているし。ゆうべ僕があおのそばを通りかかったら、誰かなかで泣いてるような気がしたよ。

マーシャ また、あんなことを……（間）

メドヴェージェンコ うちへ帰ろう、マーシャ！

マーシャ （かぶりを振る）わたし、ここに泊るの。

メドヴェージェンコ （哀願するように）マーシャ、帰ろうよ！

赤んぼがきつと、腹をすかしてるよ。

マーシャ 平気よ。マトリヨーナが飲ませてくれるわ。（間）

メドヴェージェンコ 可哀かわいそうだ。もうこれで三晩、おつ母かさん

の顔を見ないんだからな。

マーシヤ あんたも、退屈な人になったものね。以前は、哲学の一つも並べたものだけれど、今じやのべつ、赤んぼ、帰ろう、赤んぼ、帰ろう、——ばかの一つ覚えみたい。

メドヴェージェンコ 帰ろうよ、マーシヤ！

マーシヤ ひとりで帰ったらいいわ。

メドヴェージェンコ お前のお父さん、僕にや馬を出してくれないよ。

マーシヤ 出してくれてよ。願いますと言や、出してくれるわ。

メドヴェージェンコ まあ、頼んでみよう。じやあすは帰るだらうね？

マーシャ （かぎタバコをかぐ） ええ、あしたはね。うるさいわ

ねえ……

トレープレフとポリーナ登場。トレープレフは枕まくらと毛布を、ポリーナはシーツを持ちこみ、トルコ風の長椅子の上に置く。それからトレープレフは自分のデスクに行つて、腰をおろす。

マーシャ それ、どうするの、ママ？

ポリーナ ソーリンさんが、コースチヤの部屋とこに床をとつてくれとおっしゃるんだよ。

マーシャ わたしがするわ……（寝床をつくる）

ポリーナ （ため息をついて）年をとると、子供も同じだねえ：

：（デスクに近寄り、肘^{ひじ}について原稿をながめる。間）

メドヴェージェンコ じゃ、僕は行こう。おやすみ、マーシャ。

（妻の手にキスする）おやすみなさい、お母さん。（しゅうとの手にキスしようとする）

ポリーナ （腹だたしげに）いいからさ！ さっさとお帰り。

メドヴェージェンコ おやすみ、トレープレフさん。

トレープレフ黙って手を出す。メドヴェージェンコ退場。

ポリーナ (原稿をながめながら) ねえ、コースチャ、あなたが

本当の文士になるなんて、誰ひとり夢にも思いませんでしたよ。

それが今じゃ、ありがたいことに、方々の雑誌からお金がかかる

ようになりましたものね。(彼の髪を撫なでる) それに、男前も

一段とあがって、……ねえ、可愛かわいいコースチャ、いい子だから、

うちのマーシヤに、もう少し優しくしてやってくださいね! …

…

マーシヤ (床をのべながら) そつとしておいたげてよ、ママ。

ポリーナ (トレープレフに) これで、なかなか好い子さんです

よ。(間) 女というものはね、コースチャ、優しい目で見ても

らいさえすりや、ほかになんにも要いらないものよ。わたしも身

に覚えがあるけど。

トレープレフ、デスクから立ちあがり、黙って退場。

マーシャ　ほら、怒らしちまった。うるさくするからよ！

ポリーナ　わたしはお前が不憫ふびんなんだよ、マーシエンカ。

マーシャ　ありがたい仕合せだわ！

ポリーナ　お前のことで、わたしは胸を痛めつづけてきたよ。す
っかり見てるんだものね、みんなわかつてるんだものね。

マーシャ　みんな、ばかげたことよ。望みなき恋なんて、小説に
あるだけだわ。くだらない。ただ、よせばいいのよ——甘った

れた気持になつて、待てば海路の日和ひよりだかなんだか、ほかんと何かを待つている、そんな態度をね。……心に恋が芽を出したら、摘んで捨てるまでのことよ。うちの人を、ほかの郡へ転任させてくれるつて話になつてるの。そこへ移つてしまえば、——きれいに忘れるわ……胸から根こぎにしてしまふわ。

ふた部屋ほど向うで、メランコリックなワルツが聞える。

ポリーナ コースチャが弾いている。気がふさぐんだね。

マーシャ (音を立てずに、二回り三回りワルツを舞う) 肝心なのはね、ママ、目の前に見えないということなのよ。うちのセ

ミヨーンが転任になりさえすりや、あっちへ行つて、ひと月で忘れてみせるわ。みんな、くだらないことよ。

左手のドアがあいて、ドールンとメドヴェーージェンコが、車椅子のソーリンを押しながら登場。

メドヴェーージェンコ 僕のところは、今じゃ六人家族でしてね。
ところが粉は一プード（訳注 十六キロ余）七十コペイカもするんで。

ドールン そこでキリキリ舞いになる。

メドヴェーージェンコ あなたは笑っていればいいでしょう。お金

のうなってる人はね。

ドールン お金が？ 開業して以来三十年、いいかね君、しかも昼も夜も自分が自分のものでない、落ちつかぬ生活をしてきて、蓄めた金がやつと二千だけ。それもこのあいだ、外国旅行で使ってしまった。僕は一文なしさ。

マーシヤ (夫に) まだ帰らなかつたの？

メドヴェージエンコ (済まなそうに) どうしたらいいのさ？

馬を出してくれないもの！

マーシヤ (さも忌々しいまいまそうに、小声で) あんたみたいの人、

見たくもないわ！

車椅子は、室内左手の中央でとまる。ポリーナ、マーシヤ、ドールン、そのそばに腰をおろす。メドヴェージェンコはしよげ悄気て、わきへしりぞく。

ドールン　しかし、ここも変わったものですかあ！　客間が書齋になつてしまった。

マーシヤ　トレープレフさんには、ここの方がお仕事には都合がいいの。好きな時に庭へ出て、ものが考えられますものね。

夜番の拍子木の音。

ソーリン 妹はどこかな？

ドールン トリゴーリンを迎えに、停車場へね。もうじきお帰り
でしよう。

ソーリン あんたが妹をわざわざ呼び寄せられたところをみると、
わたしの病気は危ないというわけですな。（ちよつと黙つて）
どうも妙な話だ、病気が危ないというのに、薬一服くれないん
だからね。

ドールン じゃ、何がお望みなんです？ カノコ草の水薬ですか
？ ソーダですか！ キニーネですか？

ソーリン ほらまた哲学だ。ああ、なんの因果だろう！ （長椅
子をあごでしゃくつて）それ、わたしの寢床かね？

ポリーナ あなたのですわ、ソーリンさま。

ソーリン それは忝かたじけない。

ドールン (口ずさむ) 「月は夜ぞらを渡りゆく」……

ソーリン わしはコースチャに、ひとつ小説の題材をやりたいよ。

題は、こうつけるんだな——『なりたかった男』。つまり『ロ
ンム・キ・ア・ヴーリュ』さ。若いころ、わたしは文学者にな
りたかった——が、なれなかった。弁舌さわやかになりたかつ
た——が、わたしの話しぶりときたら、いやはやひどいものだ
った。(自嘲じちよう的に) 「とまあいった次第で、つまりそのあり
まして、そのう、ええと……」といったぎまでな、なんとか締
めくくりをつけよう、つけようとして、大汗かいたものさ。家

庭も持ちたかった——が、持てなかった。いつも都会で暮しかつた——が、それこうして、田舎いなかで生涯を終ろうとしている、とまあいった次第でな。

ドールン 四等官になりたかった——それは、なれた。

ソーリン (笑う) それは別に望んだわけじゃないが、ひとりでにそうなった。

ドールン 六十二にもなって人生に文句をつけるなんて、失礼ながら、——褒ほめた話じゃないですよ。

ソーリン なんといい、わからず屋だ。生きたいと言っているのに！

ドールン それが浅はかというものです。自然律によって、一切

の生は終りなからざるべからずですからね。

ソーリン それ、それが、腹いっぱい食った人の理屈さ。君はおなかぐちいものだから、人生に冷淡で、どうなろうと平気なんだ。だが、いざ死ぬときにや、君だつて怖こわくならうさ。

ドールン 死の恐怖は——動物的恐怖ですよ。……それを抑おさえなければね。死を意識的に怖おそれるのは、永遠の生命を信じる人だけです。自分の罪ぶかさが怖くなるのです。ところがあなたは、まず第一に、不信心者ですね。第二に——どんな罪がおありですか？ あなたは二十五年、司法省に勤続された——だけのことでね。

ソーリン (笑う) 二十八年……

トレープレフ登場して、ソーリンの足もとの小さな腰掛にかける。マーシヤは終始彼から眼をはなさない。

ドールン われわれがこうしていちや、トレープレフ君の仕事の邪魔ですな。

トレープレフ いや、かまいません。

間。

メドヴェージェンコ ちよつとお尋ねしますが、ドクトル、外国

の町のうち、どこが一等お気に入りました？

ドールン ジエノアですね。

トレープレフ なぜジエノアなんです？

ドールン あすこの街を歩いている群衆がすてきなんです。夕方、ホテルを出てみると、街いっぱい人波で埋まっている。その群衆にまじりこんで、なんとなくあちらこちらとふらついて、彼らと生活を共にし、彼らと心理的に融とけ合いうちに、まさしく世界に遍在する一つの靈魂といったものが、あり得ると信じるようになってきますね。つまりほら、いつか君の芝居でニーナさんが演じたあれみたいなね。ところで、ニーナさんは今どこでしょうね？ どこに、どうしているでしょうね？

トレープレフ たぶん健在でしょう。

ドールン 僕の聞いたところでは、あの人は何かいわ曰くのある生活をしたそうだが、どういうことなのかな？

トレープレフ それは、ドクトル、長い話ですよ。

ドールン それを君、てみじかにき。(間)

トレープレフ あの人は家出をして、トリゴーリンといっしょになりました。これはご存じですね？

ドールン 知っています。

トレープレフ 赤んぼができる。その子が死ぬ。トリゴーリンはあの人に飽きて、もとのキズナへ帰ってゆく——とまあ、当然の経路をたどったわけです。もつとも、あの男はこれまでも、

ついで元の女を棄てた例ためしはないんで、ただ持ち前のぐらぐらな性格から、そこここでちよいと引っかけるだけでね。僕の耳にはいったところから判断すると、ニーナの私生活は全然失敗でしたよ。

ドールン 舞台のほうは？

トレープレフ どうやら、もつとひどいらしい。モスクワ郊外の別荘地の小屋で初舞台をふんで、それから地方へ回りました。

そのころ僕は、いつもあの人から目を放さないでいて、しばらくは行く先々へついて回ったものです。大きな役ばかり引受けていましたが、演技はがさつで、味もそつけもなく、やたらにほ吼え立てる、おおぎよう大仰な見得を切る、といった調子でした。時

たま、なかなか巧うまい悲鳴をあげたり、上手な死に方を見せたり
しましたが、それも瞬間だけのことでね。

ドールン　すると、とにかく才能はあるんだな？

トレープレフ　そこはよくわかりませんでした。まあ、あるんで
しよう。こつちじや顔を見てるんですが、向うでは僕に会いた
がらず、宿へ訪ねてゆくと女中が通してくれないんです。あの
人の気持はわかるので、僕もむりに会おうとはしませんでした。
（間）さてと、まだ何を話したらいいのかな？ やがて僕がう
ちへ帰ってから、手紙が何通か来ましたつけ。聡そうめい明な、あた
たかい、なかなかいい手紙でした。べつに愚痴ぐちをこぼしてはな
いのですが、これは並大抵の不仕合せじやないなど感じられる

ほど、一行一行、病的な神経が張りつめていました。頭の向き
ようも、ちよつと変なんです。何しろ署名が、「かもめ」とい
うのですからね。『ルサールカ』（訳注 『水の精』——プー
シキンの物語詩。ダルゴムージスキイのオペラがある）の水車
屋のおやじは、自分は おおがらす 大鴉だと言ひ言ひしますが、あの人
の手紙にも、自分は「かもめ」だと、のべつに書いてある。今
あの人は、ここに來てますよ。

ドールン 來てるって、そりやまたどうして？

トレープレフ 町のね、はたご屋にいるんです。もう五日ほど、
そこに泊つてる。僕も行ってみようと思つたんですが、このマ
ーシャさんが訪ねてみたら、いつさい誰にも会わないというこ

とでした。メドヴェーージェンコ君の話では、きのう夕方ちかく、ここから二キロほどの原っぱで、あの人に出あったそうです。

メドヴェーージェンコ ええ、出あいました。あっち、つまり町のほうへ、歩いて行くところでした。僕が挨拶して、なぜ遊び

に來ないのですと聞くと、そのうち行きますという返事でした。

トレープレフ 來るもんか。(間) 親父おやじさんも、まま母も、てん

から知らん顔で通しています。それどころか、方々に見張りを

おいて、一步も屋敷へ近づけない算段なんです。(ドクトルと

いっしょに、デスクのほうへ歩を移す) ねえドクトル、紙の上

で哲學者になるのは易やさしいが、實際となるとじつに難むずかしいです

ね!

ソーリン チャーミングな娘だったがな。

ドールン え、なんですか？

ソーリン チャーミングな子だった、と言うのさ。四等官ソーリン閣下までが、ひところあの子に惚ほれていたものな。

ドールン 老いたる女ロヴレスたらし（訳注 リチャードソンの小説『クラリツサ・ハーロウ』の人物の名から）か。

シヤムラーエフの笑い声が聞える。

ポリーナ 皆さん停車場からお帰りのようですよ……

トレープレフ そう、ママの声もする。

アルカージナ、トリゴーリン、つづいてシヤムラーエフ登
場。

シヤムラーエフ（はいりながら）われわれはみな、自然の暴威
のもとに老いさらばえていきますが、奥さんは相変らず、じつ
にお若いですなあ。……薄色の〔短〕うわぎ上衣を召して、さっそう颯と
してらっしやる。……典雅ですなあ……

アルカージナ ほらまた褒め立てて、鬼やに妬かせようとなさる、
相変らずねえ！

トリゴーリン（ソーリンに）ご機嫌よう、ソーリンさん！ ま

た何かご病気ですか？ いけませんなあ！（マーシヤを見て、嬉しうれそうに）やあ、マーシヤさん！

マーシヤ おわかりになつて？ （彼の手を握る）

トリゴーリン 結婚しましたか？

マーシヤ もうとづくに。

トリゴーリン 幸福ですか？ （ドールンやメドヴェージェエンコ

と会えしやく釈をかわしたのち、ためらいがちにトレープレフのほう

へ歩み寄る）アルカージナさんのお話だと、あなたはもう昔のことは水に流して、ご立腹もとけたそうですが。

トレープレフ、彼に手をさし出す。

アルカージナ（息子に）ほら、トリゴーリンさんは、お前の新作の載っている雑誌を持ってきてくださったんだよ。

トレープレフ（雑誌を受けながら、トリゴーリンに）おそれいます、ご親切に。（腰をおろす）

トリゴーリン あんたの崇拜者たちから、宜しくとのことよろです。

……ペテルブルグでもモスクワでも、概してあなたに興味をもっていて、僕はしよっちゅう、あんたのことを訊きかれますよ。

どんな人だの、年は幾つだの、ブリュネットかブロンドかだの、といったふうだね。みんな、どうしたわけか、あなたを年配の人のように思っている。それに誰ひとり、あんたの本名を知る

者がない。なにしろあなたは、いつもペンネームで発表するものだから。あなたは、あの『鉄仮面』（訳注 ルイ十四世の代にバスチーユで獄死した謎の人物。父デュマの小説などで有名）みたいな、神秘の人ですよ。

トレープレフ　ずっとご^{とうりゆう}逗留ですか？

トリゴーリン　いや、あすはモスクワへ発^たとうと思っっています。

やむを得ません。中編ものを一つ急いで書きあげなければならんし、ほかにまだ、ある選集にも何かやる約束になっているので、一口で言えば——相も変らず、ですよ。

彼らが話している間に、アルカージナとポリーナは部屋の

中央にカルタ机をすえ、左右の翼よくを上げる。シヤムラーエフは蠟燭ろうそく（訳注 複数）をともしたり、椅子いすを並べたりする。戸棚からロトロー（訳注 Loto 数字あわせの遊び。一から九〇までの数字を飛び飛びに記した盤を配っておき、一人が袋または筒から賽を一つずつ取出しながらそこに刻まれた数字を言う。盤上の数字が先に埋まった人が勝ち）の箱が取出される。

トリゴーリン せっかく来たのに、わるい天気**に**ぶつかつたものだ。すさまじい風ですな。あす朝もしおさまつたら、湖へ釣りに出ますよ。ついでにお庭と、そらあの場所——ね、覚えてま

すか——あんたの芝居をやったあすこを、検分しなければなら
ない。モチーフは熟しているんですが、ただ現場の記憶を新た
にする必要があるんで。

マーシャ（父親に）パパ、うちの人に馬を出してやってちよう
だい！　うちへ帰らなくちやならないんだから。

シヤムラーエフ（口まねをして）馬を……帰らなくちや……

（厳格に）その眼で見たらう——今しがた停車場へ行つて来た
ばかりだ。そうそうこき使うわけにはいかん。

マーシャ　ほかの馬だつてあるじゃないの。（父親が黙っている
のを見て、片手を振る）またけんかのたねね……

メドヴェージェンコ　マーシャ、ぼく歩いて帰るよ。いいからさ

……

ポリーナ（ため息をついて）歩いて、こんな天気……（カル
タ机に向つて腰をおろす）さ、どうぞ、皆さん。

メドヴェージェンコ たかが六キロですからね。……（妻の手に
キスをする）おやすみなさい、おつ母さん。（しゅうとはキス
を受けるため渋々手を出す）僕はだれにも心配はかけたくな
いんですが、ただ赤んぼが……（一同に頭をさげる）おやすみな
さい。……（退場。さも申し訳なさそうな物腰）

シヤムラーエフ なんとか帰れるさ。將軍じゃあるまいし。

ポリーナ（机をたたき）さ、いかが、皆さん。時間が無駄です
よ、ぐずぐずしてると、お夜食をしらせに來ますわ。

シヤムラーエフ、マーシヤ、ドールン、カルタ机につく。

アルカージナ　（トリゴーリンに）秋の夜ながになると、ここではロトーをして遊ぶんですよ。ほらね、ずいぶん古いロトーでしょう。なにしろわたしたちが子供だったころ、亡くなつた母がいつしよに遊んでくれた道具ですものねえ。お夜食まで、いつしよに一勝負なさらない？　（トリゴーリンとともに席につく）つまらない遊びだけど、馴なれるとこれで、悪くないものよ。
（一同に三枚ずつ紙の盤をくばる）

トレープレフ　（雑誌をめくりながら）自分の小説は読んでく

せに、僕のはページも切ってやしない。（雑誌をデスクに置き、左手のドアへ行きかける。母親のそばを通りかかって、その頭にキスする）

アルカージナ どう、お前も、コースチャ？

トレープレフ ご免なさい、なんだかしたくないんです。……ち

よつと歩いてきます。（退場）

アルカージナ 賭^かけ金は十コペイカよ。ドクトル、わたしの分、たて替えておいてちょうだい。

ドールン 承知しました。

マーシャ みなさん、お賭けになった？ じゃ始め。……二十二！

アルカージナ はい。

マーシヤ 三！

ドールン はあい。

マーシヤ 三をお置きになつて？ 八！ 八十一！ 十！

シヤムラーエフ まあそう急ぐな。

アルカージナ わたし、ハリコフで受けた歓迎ぶりを思い出すと、

今でも頭がくらくらするわ、皆さん！

マーシヤ 三十四！

舞台うらで、メランコリックなワルツのひびき。

アルカージナ 大学生が、お祭さわぎをしてくれてね……花籠はなかご
が三つ、花束が二つ、それからほら……（胸からブローチをは
ずして、机上に投げだす）

シヤムラーエフ なるほど、こりや大したものだ……

マーシヤ 五十！……

ドールン 五十きつかり？

アルカージナ わたしの舞台衣いしやう裳しょうときたら、豪勢なものでした

よ。……なんといいても、着付けにかけちや、わたしや負けま
せんからね。

ポリーナ コースチャが弾ひいている。気がふさぐのね。可哀かわいそう
に。

シヤムラーエフ 新聞でひどく叩たたかれてるね。

マーシヤ 七十七！

アルカージナ 気にしないでいいのに。

トリゴーリン あの人はどうも運が向かない。未いまだに、ほんとの

調子が出ないんですな。何かこう変てこで、あいまいで、時によるとウワ言みたいなところさえある。人物がさっぱり生きてない。

マーシヤ 十一。

アルカージナ (ソーリンをふり返つて) ペートルーシヤ、あなた退屈？ (間) 寝てるわ。

ドールン 四等官殿はおねんねだ。

マーシャ 七！ 九十！

トリゴーリン わたしがもし、こんな湖畔の屋敷に住んだとしたら、とても物を書く気にはなりません。そんな欲望はうっちゃりにして、魚ばかり釣ってるでしょうよ。

マーシャ 二十八！

トリゴーリン ボラやマスを釣りあげるのは——なんとも言えないいい気持だ！

ドールン しかし僕は、トレープレフ君を信じていますよ。何かがある！ 何かがある！ あの人はイメージでもって思索する。

だから小説が絵画的で、鮮明で、僕は強烈な感じを受けますね。ただ惜しむらくは、あの人には、はっきりきまつた問題がない。

印象を生みはするが、それ以上に出ない。なにせ印象だけじゃ、大したことにはなりませんからね。アルカージナさん、作家の息子さんを持って、嬉しいでしょうな？

アルカージナ　それがね、あなた、まだ読んだことがないの。ひまがなくてね。

マーシヤ　二十六！

トレープレフ　静かに登場。自分のデスクへ行く。

シヤムラーエフ　（トリゴリンに）そうそう、トリゴリンさん、あなたの物が残っていましたっけ。

トリゴーリン はてな？

シヤムラーエフ いつぞやトレープレフさんが射落したかもめ鳴ね。あれを剥はく製せいにしてくれって、ご注文でしたが。

トリゴーリン 覚えがない。(しきりに考えながら) 覚えがないなあ！

マーシヤ 六十六！ ー！

トレープレフ (窓をパツとあけて、耳をすます) なんて暗いんだ！ なぜこう胸さわぎがするのか、どうもわからない。

アルカージナ コースチャ、窓をおしめ、吹きこむじやないの。

トレープレフ、窓をしめる。

マーシャ 八十八！

トリゴーリン はい、揃そろいました。

アルカージナ (うきうきして) うまい、うまい！

シヤムラーエフ ブラボー！

アルカージナ この人はね、いつどこへ行つても運がいいのよ。

(立ちあがる) じゃあちらで、何かちよつと頂きましょう。うちの有名な先生は、今日は夕飯ぬきでしたからね。お夜食のあとで、またやりましょう。(息子に) コースチャ、原稿はやめて、食堂へ行きましょう。

トレープレフ 欲しくないよ、ママ、おなかがいっぱいだから。

アルカージナ ご勝手に。(ソーリンをおこす) ペトルーシヤ、お夜食ですよ！ (シヤムラーエフと腕を組む) 話してあげるわね、ハリコフでどんなに歓迎されたか……

ポリーナ、カルタ机の上の蠟燭を消してから、ドールンといっしょに椅子を押しに行く。一同左手のドアから退場。
舞台には、デスクに向ったトレープレフだけ残る。

トレープレフ (書きつづけようとして、今まで書いたところに目を走らせる) おれは口ぐせみたいに、新形式、新形式と言ってきたが、今じゃそろそろ自分が、古い型へ落ちこんでゆくよ

うな気がする。(読む)「塀へいのポスターに曰いわく……。蒼白あおしろい
顔が、黒い髪の毛にふちどられて……。」「曰いわく、ふちどられて：
…。ふん、なつちやいない。(消す)いつそ主人公が、雨の音
で目をさますところから始めて、あとはみんな切つちまおう。
月夜の描写が長たらしく、凝りすぎている。トリゴーリンは、
ちやんと手がきまつているから、楽なもんだ。……。あいつなら、
土手の上に割れた瓶びんのくびがきらきらして、水車の影が黒く落
ちている——それでもう月夜ができあがってしまう。ところが
おれは、ふるえがちの光だとか、静かな星のまたたきだとか、
しんとした匂におやかな空気くわいのなかに消えてゆくピアノの遠音だと
か……。いや、こいつは堪たまらん。(間)そう、おれはだんだんわ

かりかけてきたが、問題は形式が古いの新しいのということじやなくて、形式なんか念頭におかずに人間が書く、それなんだ。魂のなかから自由に流れ出すからこそ書く、ということなんだ。（デスクに最寄りの窓を、誰かが叩く）なんだろう？（窓を覗く）なんにも見えない。……（ガラス戸をあけて、庭を見る）誰か石段を駆けおりたな。（呼びかける）誰だ、そこにいるのは？（出てゆく。彼がテラスを足早に歩く音がする。半分間ほどして、ニーナを連れもどってくる）ニーナ！ ニーナ！

ニーナは頭を彼の胸におし当て、忍び音にむせび泣く。

トレープレフ (感動して) ニーナ！ ニーナ！ 君か……君だ
ったのか……。僕は虫が知らしたのか、朝からずっと、胸がき
りきりしてならなかった。(彼女の帽子と長外套がいとうをとってや
る) ああ、僕の可愛かわいい、大事なひとが帰ってきた！ 泣くのは
よそう、泣くのは。

ニーナ 誰かいるわ。

トレープレフ 誰もいやしない。

ニーナ ドアの錠をおろして。はいつてくると困るわ。

トレープレフ 誰も来やしない。

ニーナ 知ってるわ、アルカージナさんが来てること。だから閉

めて……

トレープレフ（右手のドアの鍵をかけ、左手のドアに歩み寄る）
ここには錠前がない。椅子いすでふさいでおこう。（ドアの前に肘ひじ
かけ椅子を据える）さ、もう心配しないで、誰も来ないから。

ニーナ（彼の顔をじっと見つめる）ちよつと、お顔を見させて。
（あたりを見回して）暖かくて、いい気持。……あのころ、こ
こは客間だったのね。わたし、ひどく変ったかしら？

トレープレフ そう……だいぶ瘦やせて、眼が大きくなったな。ニ
ーナ、こうして君を見ていると、なんだか不思議な気がする。
どうしてあんなに、僕を寄せつけなかったの？ どうしていま
で来なかつたの？ 僕は知ってますよ、君がもう一週間ちかく、
この土地にいることは。……僕は毎日、なんべんも君の宿まで

行つては、君の窓の下に立っていた。乞食こじきみたいだね。

ニーナ あなたがさぞ、わたしを憎んでらつしやるだろうと、それが怖こわかったの。毎晩おなじ夢を見るのよ——それは、あなたがわたしを見ているくせに、わたしとは気がつかないの。この気持、知つてくださつたらねえ！　ここへ着いたその日から、わたしはあすこ……湖のへんを歩いていたの。お宅の近くにもたびたび来たけれど、はいる勇気がなかつたわ。さ、坐すわりましよう。（ふたり腰をおろす）坐つて、思いつきり話しましょう。ここはいいわ、ぽかぽかして、居心地がよくつて……。あの音は……風ね？　ツルゲーネフに、こういうところがあるわ、——「こんな晩に、うちの屋根の下にいる人は仕合せだ、暖かい

片隅かたすみを持つ人は「わたしは、かもめ。……いいえ、それじゃない。（額をこする）何を言つてたんだっけ？　そう……ツルゲ―ネフね……」主しゅよ、ねがわくは、すべての寄辺よるべなき漂泊さすらいびとを助けたまえ」……いいの、なんでもないの。（むせび泣く）

トレープレフ　ニーナ、君はまた……ニーナ！

ニーナ　いいの、これで楽になるわ。……わたし、もう二年も泣かなかつた。ゆうべおそく、こつそりお庭へはいつて、あのわたしたちの劇場が無事かどうか、見に行きました。あれは、まだ立っていますわね。それを見たとき、二年ぶりで初めて泣いたの。すると胸が軽くなって、心の霧が晴れました。ほらね、

わたしもう泣いていないわ。（彼の手をとる）で、こうして、
あなたはもう作家なのね。……あなたは作家、わたしは——女
優。お互いに、渦うずまき巻のなかへ巻きこまれてしまったのね。：
…あのころのわたしは、子供みたくにはしゃいで暮っていたわ
——あさ目がさめると、歌をうたいだす。あなたを恋してたり、
名声を夢みたり。それが今じゃどう？ あしたは朝早く、三等
に乗ってエレーツへ行くのよ……お百姓さんたちと合乗りでね。
そしてエレーツじゃ、教育のある商人連中が、ちやほや付きま
とってくれるでしょうよ。むごいものだわ、生活って。
トレープレフ なんだってエレーツへなんか？
ニーナ この一冬、契約をしたの。もう帰らなければ。

トレープレフ ニーナ、僕は君を呪いもし憎みもして、君の手紙や写真を破いてしまった。それでいて、僕の心は永久に君と結びついていると、毎分毎秒、意識していました。あなたへの恋が冷めるなんて、僕にはできないことだ、ニーナ。あなたというものを失い、作品がぼつぼつ雑誌に載りだしてからこつち、人生は僕にとって堪えがたいものになった——受難の道になった。……自分の若さが急につもとられて、僕はこの世にもう九十年も生きてきたような気がします。僕はあなたの名を呼んだり、あなたの歩いた地面に接吻したりしている。どこを向いても、きつとあなたの顔が見えるんだ。ぼくの生涯の一ばん楽しかった時代を照らしてくれた、あの優しい微笑がね。……

ニーナ（当惑して）なぜあんなことを言い出すのかしら。なぜあんなことを？

トレープレフ 僕はひとりぼっちだ。暖めてくれる誰の愛情もなく、まるで穴倉のなかのように寒いんです。だから何を書いても、みんなカサカサで、コチコチで、陰気くさい。ニーナ、お願いだ、このままいてください。でなけりや、僕もいつしよに行かせてください！

ニーナは手早く帽子と長外套を着ける。

トレープレフ どうして君は、ええニーナ？ 後生だ、ニーナ：

…（彼女が身じたくをするのを眺める。間）

ニーナ 馬車が裏木戸のところに待たせてあるの。送つてこないで、わたし一人で行けるから…（涙声で）水をちよう дайな

…

トレープレフ （コップの水を与える）今からどこへ行くの？

ニーナ 町へ。（間）アルカージナさん、来てらっしゃるの？

トレープレフ そう。…この木曜、伯父さんの工合が変だった
ので、僕たちが電報で呼び寄せたんです。

ニーナ わたしの歩いた地面に接吻したなんて、なぜあんなことをおっしゃるの？ わたしなんか、殺されても文句はないのに。

（テーブルにかがみこむ）すっかり、へとへとだわ！ 一息つ

きたいわ、一息！（首をあげて）わたしは——かもめ。……

いいえ、そうじゃない。わたしは——女優。そ、そうよ！

（アルカージナとトリゴーリンの笑い声を聞きつけて、じつと耳をすまし、それから左手のドアへ走り寄って、鍵穴からのぞく）あの人も来ている……（トレープレフのそばへ戻りながら）ふん、そう。……かまやしない。……そうよ。あの人は芝居というものを信用しないで、いつもわたしの夢を嘲ちやうしょう笑しょうしてばかりいた。それでわたしも、だんだん信念が失うせて、氣落ちがしてしまったの。……そのうえ、恋の苦勞だの、嫉妬しつとだの、赤ちゃんのことでしょつちゆうびくびくしたりで……わたしはこせついた、つまらない女になってしまって、でたらめな演技を

していたの。両手のもて扱い方も知らず、舞台上で立っていることもできず、声も思うようにならなかつた。ひどい演技をやつてるなど自分で感じるときにの心もち、とてもあなたにはわからないわ。わたしは——かもめ。いいえ、そうじゃない……。おぼえてらして、あなたはかもめ鴉をうちおと射落したわね？ ふとやって来た男が、その娘を見て、退屈まぎれに、破滅させてしまった。

……ちよつとした短編の題材……。これでもないわ。……（額をこする）何を話してたんだっけ？……そう、舞台のことだったわ。今じゃもうわたし、そんなふうじゃないの。……わたしはもう本物の女優なの。……わたしは楽しく、喜び勇んで役を演じて、舞台に出ると酔つたみたいになって、自分はすばらし

いと感じるの。今、こうしてここにいるあいだ、わたしはしょつちゆう歩き回つて、歩きながら考えるの。考えながら、わたしの精神力が日ましに伸びてゆくのを感じるの。……今じゃ、コースチャ、舞台に立つにしろ物を書くにしろ同じこと。わたしたちの仕事で大事なものは、名声とか光栄とか、わたしが空想していたものではなくつて、じつは忍耐力だということが、わたしにはわかったの、得心が行つたの。おのれの十字架を負うすべを知り、ただ信ぜよ——だわ。わたしは信じているから、そう辛いつらこともないし、自分の使命を思うと、人生もこわくないわ。

トレープレフ　（悲しそうに）君は自分の道を発見して、ちゃん

と行く先を知っている。だが僕は相変わらず、妄想もうそうと幻影の混こ沌んとんのなかをふらついて、一体それが誰に、なんのために必要なのかわからずにいる。僕は信念がもてず、何が自分の使命かということも、知らずにいるのだ。

ニーナ（きき耳を立てて）シツ。……わたし行くわ。ご機嫌よう。わたしが大女優になったら、見にいらしてちようだいね。

約束してくださいさる？ では今日は……（彼の手を握る）もう夜がふけたわ。わたしやっこさで、立っているのよ。精も根も尽きてしまった、何か食べたいわ……

トレープレフ ゆっくりして行って、夜食ぐらい出すから……

ニーナ いいえ、駄目……。送ってこないでね、ひとりで行ける

から。……馬車はついそこなんですもの。……じゃ、アルカー
ジナさんはあの人を連れていらしたのね？ なあに、どうせ同
じことだわ。……トリゴーリンに会っても、なんにも言わない
でね。……わたし、あの人が好き。前よりももっと愛している
くらい。……ちよつとした短編の題材か。……好きだわ、愛し
てるわ、やるせないほど愛してるわ。もとはよかったわねえ、
コースチャ！ なんとという晴れやかな、暖かい、よろこばしい、
清らかな生活だったでしょう。なんとという感情だったでしょう
——優しい、すつきりした花のような感情。……おぼえてらっ
しやる？……（暗誦する）「人も、ライオンも、鷲も、雷
鳥も、角を生やした鹿も、鷺鳥も、蜘蛛も、水に棲む無言の

魚も、海に棲むヒトデも、人の眼に見えなかつた微生物も、――つまりは一切の生き物、生きとし生けるものは、悲しい循環めぐりをおえて、消え失うせた。……もう、何千世紀というもの、地球は一つとして生き物を乗せず、あの哀れな月だけが、むなしく灯火あかりをともしている。今は牧場まきばに、寝ざめの鶴つるの啼なく音ねも絶えた。菩提樹ぼだいじゆの林に、「こがね虫の音ずれもない」……（発作的にトレープレフを抱いて、ガラス戸から走り出る）

トレープレフ（間をおいて）まずいな、誰かが庭でぶつかつて、あとでママに言いつけると。ママは辛いだろうからな。……

二分間ほど、無言のまま原稿を全部やぶいて、デスクの下

へほうりこむ。それから右手のドアをあけて退場。

ドールン（左手のドアを、うんうん押しあけながら）おかしいぞ。錠がおりてるのかな……（はいつて、肘かけ椅子を元の場所しょうがいぶつにおく）**障**碍物競走だ。

アルカージナ、ポリーナ、つづいてヤーコフは酒さかびん瓶（訳注 複数）をもち、それにマーシャ、あとからシヤムラーエフ、トリゴーリン、それぞれ登場。

アルカージナ 赤ブドウと、トリゴーリンさんのあがるビールは、

このテーブルに置いてちようだいな。ロトーをしながら飲む
だからね。さ、坐りましょう、皆さん。

ポリーナ (ヤーコフに) すぐお茶を出しておくれ。 (蠟燭^{ろうそく})

(訳注 複数) をともし、カルタ机に着席する)

シヤムラーエフ (トリゴーリンを戸棚のほうへひっぱって行く)

それから、さつきお話しした品ですよ…… (戸棚から鴉の剥^は
^{くせい}製をとり出す) あなたのご注文で。

トリゴーリン (鴉を眺めながら) 覚えがない! (小首をかし
げて) 覚えがないなあ!

右手の舞台うらで銃声。一同どきりとなる。

アルカージナ　（おびえて）なんだろう？

ドールン　なあに、なんでもない。きっと僕の薬カバンのなかで何か破裂したんでしょう。心配ありません。（右手のドアから退場して、半分間ほどで戻ってくる）やっぱりそうでした。エーテルの壘^{びん}が破裂したんです。（口ずさむ）「われふたたび、おんみの前に、恍惚^{こうつこつ}として立つ」……

アルカージナ　（テーブルに向ってかけながら）ふっ、びっくりした。あの時のことを、つい思い出して……（両手で顔をおおう）眼のなかで、暗くなっちゃった……

ドールン　（雑誌をめくりながら、トリゴーリンに）これに二カ

月ほど前、ある記事が載りましたね……アメリカ通信なんです
が、ちよつとあなたに伺いたいと思つていたのは、なかでもそ
の……（トリゴーリンの胸に手をかけ、フットライトのほうへ
連れてくる）……なにしろ僕は、その問題にすこぶる興味があ
るもので……（調子を低めて、小声で）どこかへアルカージナ
さんを連れて行つてください。じつは、トレープレフ君が、ピ
ストル自殺をしたんです。……

——幕——

青空文庫情報

底本：「かもめ・ワーニヤ伯父さん」新潮文庫、新潮社

1967（昭和42）年9月25日発行

2004（平成16）年11月25日46刷改版

※楽譜は「世界文学大系46 チェーホフ」筑摩書房、1958（昭和33）年12月5日からとりました。

入力：米田

校正：阿部哲也

2010年11月6日作成

2012年10月20日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

かもめ
ЧАЙКА

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

著者 ——喜劇 四幕——

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>